

地域連携センター一年報

第3号(平成21年度)

愛知県立大学

「愛知堅実大学」を目指して

地域連携センター長 加藤 史朗

地域連携センターの三年目は、生産台数世界一を達成したとたんの大赤字というトヨタショックに始まり、大量リコールという新たなトヨタショックの中で終わった。「ものづくり愛知」の象徴というべき企業の激震は、私たちの心まで動揺させ浮足立たせている。万博当時の「元気な愛知」は今や昔である。希望の光が見えず、他者との絆を確認出来ない不安。課題が山積しているのに、どこから手をつけて良いか分からない焦燥。賽の河原で石を積むようなストレス。現下の状況は、そのように悲観的なものだ。しかし、こうした不安は、既に1970年代初めから顕れ始めていた。石油ショックを機に、日本の産業構造が重厚長大から軽薄短小へと転換し始めた頃のことである。心理的変動はより早く1968年をピークとした世界的規模の若者の反乱に見られた。それは、市場経済のグローバル化がもたらす荒波の予兆に触発されたものではなかっただろうか。若者たちの不安は的中した。だが産学協同路線の粉碎などを唱えた彼らの運動は、グローバル資本主義の「革新性」の前に完膚なきまでに打ちのめされた。「資本の革新性」が持つ破壊力は、やがてソ連をも崩壊に追い込んだ。こうした顛末を世界史的に象徴するのが、中国である。文化大革命の激動を経験した国が、今やグローバル市場経済の覇者になろうとしている。

石油ショックの後、行革が叫ばれ、臨教審の下で「教育の自由化」が主張された。バブル経済の狂奔の中で、従来の地道な教育が時代遅れだと嘲笑され、「自己実現」がキーワードとなり、英語とパソコンを使いこなすことが「グローバル・リテラシー」だと言われるようになった。バブルが弾けると、そのツケは、「聖域なき構造改革」というイタミで支払われることとなる。「大学改革」の中で、教養課程や夜間教育の火が消されていった。グローバル化はまた一方で、地域社会の空洞化をもたらした。地域再生や地域活性化が喧伝されて、大学に地域連携や社会貢献が求められるようになった。こうして大学は、様々なステークホルダー（利害関係者）や市場という「見えざる手」に呪縛された存在となったのである。

愛知県立大学に地域連携センターが生まれたのもまさにそうした動きの中においてである。独法化を機に地域連携センターが生まれ、その中に産学連携推進室が置かれた。どの大学のホームページを見ても、まるで金太郎飴のように「地域連携」や「産学連携」が顔を出す。様々なコンソーシアムやベンチャー・ビジネスの試み、多彩な公開講座やイベントの企画など、派手な動きや宣伝が目立っている。それらと比較すると、愛知県立大学の現状は、「遅れている」と言うべきかもしれない。だが決して焦る必要はない。目の前にいる学生たちをよく見ることの方が大切だからである。例えば注目に値するものとして、昨秋の県大祭で実施された学生ボランティア・シンポジウムがある。地域と連携した彼らの生き生きとした活動の中に、未来の希望が顔をのぞかせていた。地域連携の要は学生である。究極の地域貢献・社会貢献とは、こうした学生たちの自己形成を助け、優れた「知財」として世に送り出すことに他ならない。学生たちは地域連携によって育てられ、ソーシャル・スキルを獲得しながら更なる地域連携を担うであろう。

大学は「研究＝教育の場」であるという至極当たり前のことに、私たちはもっと確信を持つべきである。旧ソ連を思わせる遠大な「計画作り」や膨大な「書類作り」の類はやめた方が良い。「ゆとり」が必要なのは小学校よりも、むしろ今の大学だからである。世の中のトレンドを読み、世界の動きを注視することはもちろん必要である。だが「見えざる手」に振り回され、短期的・近視眼的な「評価」に一喜一憂しては「研究＝教育の場」が荒廃してしまうだろう。背伸びしたり浮足立ったりしないで、地域に根付いた「愛知堅実大学」を目指すこと。それがトヨタショックの教訓である。

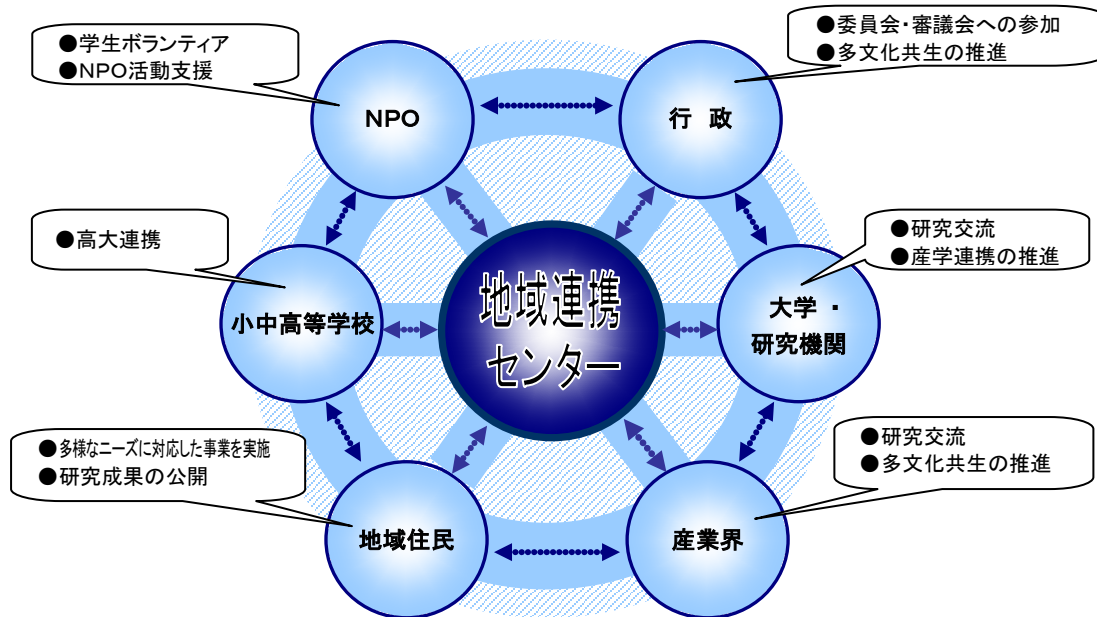
年報目次

1	組織と運営-----	1
1. 1	センター運営会議-----	4
1. 2	公開講座企画運営委員会-----	7
2	平成21年度活動状況-----	9
3	事業実績-----	13
3. 1	自主事業 -----	15
	公開講座	
	学術講演会	
	3 研究会活動	
	その他の活動	
3. 2	連携・協力事業-----	30
	行政との連携	
	その他各種団体との連携	
3. 3	その他-----	37
4	産学連携推進室-----	39
5	看護実践センター-----	47
6	この一年を振り返って -----	51
7	参考資料-----	57
7. 1	広報活動-----	59
7. 2	過去の公開講座開催結果-----	61

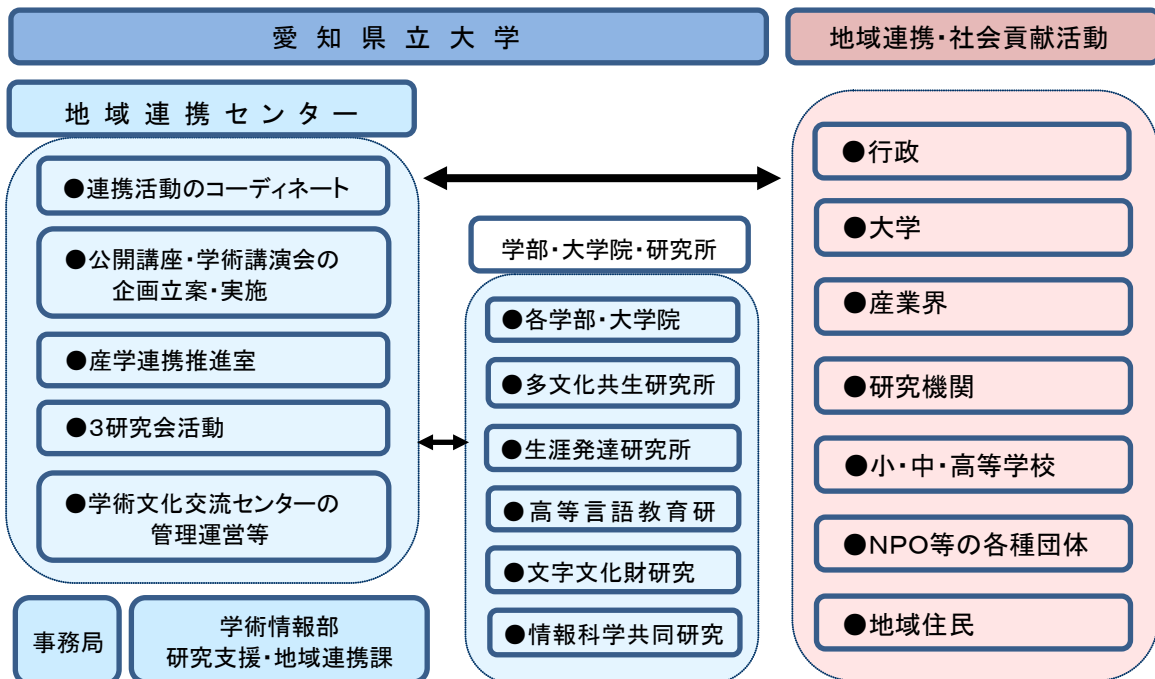
1 組織と運営

地域連携センター紹介

○地域連携活動を推進する愛知県立大学の総合的な窓口として次のような業務を行っています。



○地域連携センターの位置づけ



1. 1 センター運営会議

愛知県立大学地域連携センター規程

(趣旨)

第1条 この規程は、愛知県立大学学則第6条の規定に基づき設置される地域連携センター（以下「センター」という。）の運営に関する基本的事項について定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、地域連携活動を円滑かつ組織的に推進することを目的とする。

(支部)

第3条 センターの支部として、守山キャンパスに看護実践センターを置く。

(業務)

第4条 センターは、その目的を達成するために、次に掲げる業務を行う。

- (1) 行政との連携に関すること。
- (2) 他大学・研究機関等との連携に関すること。
- (3) 産業界との連携に関すること。
- (4) 小・中・高等学校との連携に関すること。
- (5) NPO等各種団体との連携に関すること。
- (6) 学術講演会、公開講座の企画・立案・実施に関すること。
- (7) 学術文化交流センターの管理・運営に関すること。
- (8) その他センター長が適当と認めた業務

2 前項以外の業務に関する看護実践センターの運営に関しては、別に定める。

(センター長)

第5条 センターに、センター長を置く。

2 センター長は、学長の命を受け、センターの業務を掌理する。

3 センター長の任期は、2年とする。ただし、任期の途中でセンター長が交替した場合は、後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

4 センター長に事故がある場合は、センター長が予め指名したセンター長補佐がセンター長の職務を代理する。

(看護実践センター長)

第6条 看護実践センターに、看護実践センター長を置く。

2 看護実践センター長は、センター長の命を受け、センターの業務を補佐する。

3 看護実践センター長の任期は、2年とする。ただし、任期の途中で看護実践センター長が交替した場合は、後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター長補佐)

第7条 センターに、センター長補佐を置く。

2 センター長補佐は、センター長及び看護実践センター長の所属学部以外の学部から各1名を、学長がセンター長と協議の上指名する。

3 学長は、センターの運営に必要と判断した場合、センター長と協議の上、センター長及び看護実践センター長の所属学部からセンター長補佐を指名することができる。

- 4 センター長補佐は、センター長の命を受け、センター長の職務を補佐する。
- 5 センター長補佐の任期は、1年とする。ただし、任期の途中でセンター長補佐が交替した場合は、後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(センター運営会議)

第8条 センターの業務を円滑に運営するため、センター運営会議を置く。

- 2 センター運営会議は次の者をもって組織し、議長はセンター長をもって充てる。

- (1) センター長
- (2) 看護実践センター長
- (3) センター長補佐
- (4) 学術情報部長

- 3 運営会議はセンター長が召集する。

(委員会)

第9条 第4条第6号の業務に係る重要な事項について審議するため、公開講座企画運営委員会を置く。

- 2 前項の委員会に関して必要な事項は、別に定める。

(産学連携推進室)

第10条 第4条第3号の規定による業務を推進するため、産学連携推進室（以下「推進室」という。）を置く。

- 2 前項の推進室に関して必要な事項は、別に定める。

(庶務)

第11条 センターの庶務は、研究支援・地域連携課で行う。

(補則)

第12条 この規程に定めるセンターの運営に関し必要な事項は、学長が定める。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

地域連携センター運営会議名簿

所 属	平成21年度運営会議氏名
議長（地域連携センター長）	加 藤 史 朗
看護実践センター長	岩 瀬 信 夫
地域連携センター長補佐	福 沢 将 樹
地域連携センター長補佐	松 宮 朝
地域連携センター長補佐	小 栗 宏 次
学術情報部長	春日井 隆 司

地域連携センター事務

所 属	氏 名
研究支援・地域連携課主査	伊 藤 祐 司
研究支援・地域連携課	夏 目 美 和

愛知県立大学公開講座企画運営委員会規程

(趣 旨)

第1条 この規程は、地域連携センター（以下「センター」という。）に設置する公開講座企画運営委員会（以下「委員会」という。）について、地域連携センター規程第9条第2項の規定に基づき、必要な事項を定めるものとする。

(審議事項)

第2条 委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 公開講座の企画・立案・実施に関すること
- (2) 学術講演会の企画・立案・実施に関すること
- (3) その他公開講座及び学術講演会に関すること

(組 織)

第3条 委員会は、次の委員をもって組織する。

- (1) 地域連携センター長
 - (2) 看護実践センター長
 - (3) 地域連携センター長補佐
 - (4) 各学部及び各大学院研究科から選出された者（学部・研究科の双方を兼ねる。） 各1名
 - (5) 地域連携センター長が指名する事務職員
- 2 委員会に、委員長を置き、地域連携センター長をもって充てる。
- 3 委員の任期は、1年とする。

(会議及び運営)

第4条 委員長は、会議を招集し、その議長となる。

- 2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代理する。
- 3 委員会は、委員の3分の2以上の出席がなければ開くことができない。
- 4 会議の議事は、出席者の過半数の同意をもって決することとし、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第5条 委員長が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を認めることができる。

(庶 務)

第6条 委員会の庶務は、研究支援・地域連携課が担当する。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

公開講座企画運営委員会委員名簿

所 属	平成22年度委員氏名
委員長（地域連携センター長）	
看護実践センター長	
地域連携センター長補佐	
地域連携センター長補佐	
地域連携センター長補佐	
学部選出	
学部選出	
学部選出	
学部選出	
学部選出	
学部選出	
事務職員	
事務職員	

2 平成21年度活動状況

日時		会議	行事・活動
21年 4月	10日	第1回センター運営会議	
	15日	第1回公開講座企画運営委員会	
	18日		にほんの里フェスタ（森林文化協会主催、共催事業）
	22日		ジェイク・シマブクロ氏講演会（アメリカンセンター主催、共催事業）
	24日	第2回センター運営会議	長久手町長表敬訪問（副学長、センター長）
5月	15日	第3回センター運営会議	
	11日		ケルンの風演奏会（県立芸術大学との連携事業）
	16日		第1回「小学校外国語活動」連続セミナー（共催事業）
	20日	第2回公開講座企画運営委員会	
	29日	第4回センター運営会議	
		第1回産学連携推進室運営会議	
30日		第2回「小学校外国語活動」連続セミナー（共催事業）	
6月	5日		「人と自然の共生国際フォーラム」第1回実行委員会（センター長）
	6日		第3回「小学校外国語活動」連続セミナー（共催事業）
	12日	第5回センター運営会議	瀬戸市長表敬訪問（センター長）
	19日		国際協カイニシアティブ事業「実施委員会」立ち上げ準備委員会
	20,21日		第8回産学官連携推進会議（京都）（産学連携推進室長）
	27日		公開講座「子どもの発達の危機と向き合う」第1回
	30日		県と大学の意見交換会（県知事政策局企画課）（センター長）
7月	3日	第6回センター運営会議	
	10日		名古屋市立大学調査訪問（センター長）
	11日		公開講座「子どもの発達の危機と向き合う」第2回
	15日		学内知的財産セミナー（特許庁共催）
	17日	第7回センター運営会議	
	24日	第2回産学連携推進室運営会議	
	29日	第3回公開講座企画運営委員会	第1回文理連携研究会「オンデマンド形式の授業」
8月	4日		名古屋産業大学学長 連携に関する打合せのため来校
	5日		国際協カイニシアティブ 第1回アドバイザーボード
	12日	第8回センター運営会議	
	17日		「人と自然の共生国際フォーラム」第2回実行委員会（センター長）
	21日		「第1回リニモ沿線地域づくり会議」
	26日		愛知教育大学理事（連携担当） 連携に関する打合せのため来校
			国際協カイニシアティブ 第1回研究会
	27,28日		大学知財アドバイザー派遣先大学担当者研修
9月	9日	第9回センター運営会議	
		第4回公開講座企画運営委員会	
	12,13日		第6回全国大学コンソーシアム研究交流フォーラム（センター長）
	23日		国際協カイニシアティブ 第2回研究会
	25日		第8回大学等知的財産連絡会議（兵庫医科大学）
29日		知財管理体制構築準備委員会キックオフ	

日時	会議	行事・活動
10月	6日	「あいち地域づくり連携大学」第1回(県地域振興部との共催、多目的ホール)
	9日	第10回センター運営会議
	10日	公開講座(大学連携講座)「ことばの世界・世界のことば」第1回(名古屋市女性会館)
	10,11日	「あいちワールド・フレンドシップ・フェスタ」(県国際課との連携事業)
	17日	公開講座(大学連携講座)「ことばの世界・世界のことば」第2回(名古屋市女性会館)
	18日	第1回公共政策研究会(「戦国・江戸時代の長久手を歩くー城・町・村・合戦の景観ー」)
	24日	公開講座(大学連携講座)「ことばの世界・世界のことば」第3回(名古屋市女性会館)
	24,25日	第3回人と自然の共生国際フォーラム(センター長)
	29日	国際協カイニシアティブ 第2回アドバイザーボード
11月	31日	学生ボランティア・シンポジウム(多目的ホール) おろしゃ会講演会(小ホール)
	3日	公開講座(日本文化学部国際シンポジウム)「日本文化の多元性をさぐる」
	4日	第5回公開講座企画運営委員会
	5日	「国際協カイニシアティブ」公開講演会
	9,10日	大学知財アドバイザー派遣先大学責任者等会議(副学長、センター長、産学連携推進室長)
	13日	「あいち地域づくり連携大学」第2回(サテライトキャンパス)
	18日	愛知県教育委員会との高大連携に関する協議(センター長)
	20日	第11回センター運営会議 第1回知財管理体制構築準備委員会
	27日	大学知財アドバイザー派遣先大学に対する実地ヒアリング 「あいち地域づくり連携大学」第3回(サテライトキャンパス)
12月	29日	「環境にやさしい交通まちづくり講演会」(リニモねっととの共催)
	2日	第1回環境共生研究会(多文化共生研究所との合同研究会)
	4日	学術講演会(講師:上田勝美氏「世界平和と人類の生命権確立」)
	5日	「愛知教育大学地域連携フォーラム2009」(センター長)
	6日	第2回公共政策研究会「ひきこもりを考えるセミナー」(長谷川俊雄先生)
	16日	第6回公開講座企画運営委員会
	18日	「あいち地域づくり連携大学」第4回(サテライトキャンパス)
	22日	第2回知財管理体制構築準備委員会 瀬戸市教育長表敬訪問(センター長)
22年 1月	25日	第12回センター運営会議
	12日	「姜尚中氏講演会」(県大ファンファーレ2009特別企画)
	22日	第2回環境共生研究会(多文化共生研究所との共催) 「あいち地域づくり連携大学」第5回(サテライトキャンパス)
2月	27日	第13回センター運営会議
	3日	第7回公開講座企画運営委員会
	5日	「愛知県地域づくり研修交流会」(県地域振興部との共催、多目的ホール)
	12日	第3回知財管理体制構築準備委員会
3月	25日	第8回公開講座企画運営委員会
	6日	第2回文理連携研究会「ロボカップ小型リーグのロボット技術」
	8日	第14回センター運営会議
	17日	学術講演会(講師:イルゼ・ヴィッシャー氏「文法化と語彙化の相互作用」)
	26日	第15回センター運営会議 第9回公開講座企画運営委員会

3 事業実績

3.1 自主事業

平成21年度 公開講座(教育福祉学部)実施結果

1. 講座名 「子どもの発達の危機と向きあう」
2. 開催日時 平成21年6月27日(土)・7月11日(土)
3. 会場 学術文化交流センター 多目的ホール
4. 受講申込者 58名(定員120名)
5. 講座内容・講師名

	テーマ	講師・シンポジスト	受講者数
第1回	6月27日(土) 児童期の身体と運動の発達支援	シンポジスト： 丸山 真司(教育福祉学部教授) 稲嶋修一郎(教育福祉学部准教授) 堤 吉郎(大口北小学校教諭)	44
第2回	7月11日(土) 「困難をかかえた子ども」の 理解と支援	講師： 浜谷 直人(首都大学東京大学院教授) 話題提供者： 田中 良三(教育福祉学部教授) 山本 理絵(教育福祉学部准教授)	50

※その他本学学生の受講あり(第1回:20名、第2回:71名)

第1回(6月27日)



第2回(7月11日)



【コメント】

本講座は、子どもの発達の危機と向きあい、子どもへの発達支援の理論と実践を深め交流することを目的として企画された。第1回のシンポでは、運動の「好きな子—嫌いな子」、「できる子—できない子」などの2極化傾向がデータで示され、その解決策が検討された。第2回は、保育・教育現場で増えている「育てること・育つことに困難を抱えた子ども」をとりあげ、そうした子どもたちをどのように理解し、支援していったらよいのか、具体的な事例を通して提案された。参加者からは、「子どもの発達の可能性を深く学ぶことができた」「明日からの実践にたくさんのヒントをもらった」など概ね良好な感想が寄せられた。

(公開講座企画運営委員会委員(教育福祉学部)坪井由実)

**平成21年度 公開講座(外国語学部)実施結果
(名古屋市大学連携講座)**

1. 講座名 「ことばの世界・世界のことば」
2. 開催日時 平成21年10月10日(土)、17日(土)、24日(土)
3. 会場 名古屋市女性会館
4. 受講申込者 51名(定員60名)
5. 講座内容・講師名

○第1回(10月10日) 第2回(10月17日)、第3回(10月24日)

回	テーマ	講師	受講者数
第1回	①英語からことばを考える ー英熟語から見えてくることばの構造及び英語学習ー	森田久司/ ジョン・ビントリフ	43
	②ドイツ語 ー歴史と地域的多様性ー	松尾誠之	
第2回	③漢字と中国人 ーその愛憎の歴史から見えてくるものー	竹越 孝	32
	④シルクロードの文字をたどる ー西安からソグディアナを経てインド西北に到るー	吉池孝一	
第3回	⑤フランス語を知る、ことばを考える	石野好一	34
	⑥スペイン語の世界・世界のスペイン語	堀田英夫	

【第1回】



【第2回】



【第3回】



【コメント】

今年度の外国語学部の公開講座は、愛知県立大学高等言語研究所の企画により、また名古屋市生涯学習推進センターの大学連携講座として、名古屋市女性会館で開催された。企画当初の対象者は、ことばや外国語に関心を持つ一般地域住民、高校生であったが、講師が想定していた対象者と実際の受講者との間にギャップがあったことは否めなかった。とりわけ第1回の英語をテーマとした講座では、受講者から専門的な質問が出された一方で、内容が高度すぎるといった指摘がなされるなど、公開講座のあり方を今一度、検討する必要性を痛感させられた。公開講座の内容をどこまで専門的なものにすべきか、対象者を絞るのか、オープンにするのかなど、今後の課題は多い。(公開講座企画運営委員会委員(外国語学部)久田由佳子)

平成21年度 公開講座(日本文化学部)実施結果
(日本文化学部新設記念企画国際シンポジウム)

1. 講座名 「日本文化の多元性をさぐる」
～言語・文学・歴史・社会からみる日本文化の研究と発信～
 2. 開催日時 平成21年11月3日(火・祝) 9時30分～16時30分
 3. 会場 講堂
 4. 参加者 約280名(うち学生約230名)
 5. 講演内容・講師名
 - ① 古代韓・日(日・韓)の文化交流—相通じる古代東アジア世界—
尹善泰(ユン・ソンテ)氏(東国大学校歴史教育科 助教授)
 - ② 日韓における歴史大河ドラマとナショナリズム
朴順愛(パク・スネ)氏(湖南大学校日本語学科 教授)
 - ③ 陶磁学の提唱—沈船引揚げ資料からみた東アジアの交流—
森達也氏(愛知県陶磁資料館 主任学芸員)
 - ④ ポルトガル語日本語の比較研究からみた日本文化
ジュンコ・オタ氏(サンパウロ大学哲学文学人間科学部教授)
 - ⑤ 美術史からの日本文化
マダレナ・ハシモト・コルダロ氏(サンパウロ大学哲学文学人間科学部教授)
- アトラクション 「一の谷の合戦」公演 知立からくり保存会

【講演の様子】



【パネルディスカッション】



【コメント】

「日本文化」を基軸にして、韓国(協定締結校)およびブラジル(協定締結協議校)といった「外国」と愛知県陶磁資料館という「地域」との連携を模索しつつ、日本文化の「多元性」をその広がりや深みから捉え返す、まさに学部新設記念というにふさわしい企画となった。外国から日本文化を見るという相対的な視点があつてこそ、日本文化理解の深みは増す、という今回の企画の趣旨は、今後の日本文化学部のあり方そのものを示しているといえる。そしてさらに、本学が位置する愛知県には、ほかならぬ韓国(朝鮮)やブラジル出身の多くの方々が居住している、という現実からすれば、「地域から浮き彫りにされる外国」という、今般の企画の趣旨に隠されたもう一つの重要な側面が理解されるだろう。

(公開講座企画運営委員会委員(日本文化学部) 川畑博昭)

平成21年度 学 術 講 演 会 実 施 結 果

1. 講演名 「世界平和と人類の生命権確立」
2. 開催日時 平成21年12月4日（金）14時30分～16時00分
3. 会 場 講堂
4. 講 師 上田勝美氏（龍谷大学名誉教授）
5. 聴講者数 約360名（うち学生約315名）

【講演する上田勝美氏】



【コメント】

平和主義を具体的に活かすために提唱されたのが「生命権」という概念であり、本学術講演では、上田勝美先生によって再構成された「生命権」概念と、その背景となった第二次世界大戦後の世界の平和への歩みとその中での日本の動向が講じられた。内容は、国際的な文書の背景から日本の平和をめぐる具体的な動きまで多岐に亘り、それらの関連を説明するものであった。聴講した学生の感想としても、平和についての俯瞰を促され、日常では気づかない平和の歴史的な意義に気づいたというものが多く、学部を超えて平和と人間の存在を考える契機を与えることができた。また、地域住民の聴講も多く、質疑応答の時間には、住民と学生の意見交流も活発であった。

（教育福祉学部社会福祉学科 木幡洋子）

平成21年度 学 術 講 演 会 実 施 結 果

1. 講演名 “The Interplay between Grammaticalization and Lexicalization”
(文法化と語彙化の相互作用) [通訳なし]
2. 開催日時 平成22年3月17日(水) 13時00分～14時30分
3. 会 場 学術文化交流センター 小ホール
4. 講 師 日本学術振興会外国人招へい研究者 ドイツ連邦共和国ポツダム大学教授
Ilse Wischer (イルゼ ヴィッシャー) 博士
5. 聴講者数 71名(うち学生60名)

【当日の写真】



【コメント】

英語史の分野において、近年世界中で脚光を浴びているものの1つに「文法化」「語彙化」現象がある。文法化とは、開かれた語彙項目が閉じられた類の文法的要素に変化する過程をいう。完了の助動詞 *have* が所有をあらわす本動詞 *have* から転じたのも、接続詞 *provided* (= *if*) が動詞 *provide* から生成されたのも文法化である。語彙化は、*may + be* 「～であるかもしれない」⇒ *maybe* 「おそらく」、命令文 *Forget me not!* 「忘れないで」⇒ 植物名 *forget-me-not* 「勿忘草」) のような生成過程である。講演では、文法化と語彙化の特徴付けの後、英語の語句がいかにして文法化に向かうのか、あるいは語彙化に向かうのか、両者はどのように影響しあうのかに関して、主として接頭辞・接尾辞を採り上げ講じていただいた。この分野におけるヨーロッパの先駆者かつ第一人者の名にしおう堂々たるご講演であった。近隣大学から訪れた教員・学生からも感銘の意が表された。勇気の要ったことであろうに、英文学科3年生からも質問が出された点は主催者として嬉しかった。

講演後には学生食堂に40名が集い、懇親を深めた。会場では、女史を囲んで英語・ドイツ語・ロシア語会話が飛び交い、英語学やドイツの話に花を咲かせ、文化交流を行った。

当初参加登録者は86名であった。実際の聴講者は若干これを下回ったが、春季休業日真っ只中の行事であった点を考慮すると、高い出席率であったと考える。これをきっかけに世界に羽ばたく学生が輩出してほしい。私どもの切なる願いである。学振による有意義な講演会であったと総合判断する。

(受入研究員 外国語学部英文学科・英米学科 中村不二夫)
(受入協力研究員 同 石原 覚 熊谷吉治)

第1回 公共政策研究会 実施結果

1. 開催日時 平成21年10月18日(日) 13時00分～17時00分
2. 会場 長久手町内
3. 参加者数 20名(うち教職員16名)
4. 講師 山村亜希 日本文化学部准教授
5. 進行 小池康弘 外国語学部教授(公共政策研究会座長)
6. タイトル 「戦国・江戸時代の長久手を歩く ― 城・町・村・合戦の景観 ― 」

(内容)長久手は戦国時代の小牧・長久手の合戦で有名であるが、現在の市街化された町から当時の景観を想像することは難しい。しかし、様々な過去の地図資料を駆使することによって、現在の地図上に、かつての城、町、村、寺、神社、道路や、合戦の行軍ルート、旧地形を推定し、復原することができる。また、その復原図を持って町内を歩くと、意外なほど、過去の景観の痕跡が現在の風景の中に生きていることが実感される。そこで本研究会では、①戦国期長久手の景観復原の説明(レクチャー)と、②現地の巡検(フィールドワーク)を併せて行い、身近な日常の風景の中に、戦国から江戸時代にかけての歴史の痕跡を「発見」する、学術的な(歴史地理学の)見方と方法を紹介する。この研究会を通じて、長久手の歴史が特別な史跡にのみ残されているのではなく、今私たちの生きている地域そのものを形成していることを参加者が理解し、学術的な研究視点・成果をいかに現代の地域に還元するかを考える機会を提供する。

7. 日程 午後1時～2時 長久手まちづくりセンターで山村先生の説明(レクチャー)
午後2時～5時 フィールドワーク
(古戦場公園→血の池公園→景行天皇社→富士浅間神社→岩作→安昌寺)

【当日の写真】



(平成21年10月19日中日新聞朝刊)

【コメント】

本研究会は、県立大学の位置する地元・長久手町の歴史を、現在の身近な地理（地図・風景）を通じて再考する機会を提供するために、企画したものである。長久手は、戦国時代末期の「小牧・長久手の合戦」の舞台として有名であるが、その具体的内容や町内の関連史跡・文化財となると、日々町内の県立大学に通っていても、意外と知らないのではないだろうか。もしくは、「古戦場公園」や「首塚」などの史跡の存在は知っていても、それらと合戦の展開との関係や、なぜそこに史跡があるのかについて意識することは、あまりないのではないだろうか。実際、合戦の舞台となった現在の長久手町西部（リニモ「古戦場公園」駅以西）は、名古屋市に隣接する郊外住宅地として近年開発が急速に進み、それ以前の古い景観がほとんど残されていないため、今の長久手を目にして、約400年前の合戦がどこでどのように行われたのかを想像することは、至難の業である。そこで本研究会では、長久手合戦の行われた戦国時代の長久手の景観を、現在の地図や風景と対照させながら可能な限り細かく復原し、参加者の方々に、長久手の地理を介して、現代と戦国時代とを結びつける試みを実感してもらった。

当日は、秋の行楽日和の日曜日にも関わらず、20名の参加者にお越しいただいた。最初のレクチャーでは、まず現在と明治期の長久手の地図を重ね合わせて比較し、住宅地開発以前の旧景観の把握につとめた。そして、その地図に地名を手がかりとして長久手合戦における様々な出来事を落としこみ、今の地図上に戦国期の景観と長久手合戦の展開が表現された地図を参加者各自に作成してもらった。日頃は見慣れない地形図や明治期の地図を「読む」という歴史地理学の専門的な作業を、1時間という短い時間内に完了させなくてはいけなかったのだが、参加された方々は非常に熱心かつ真剣に作業に取り組んでくださり、スムーズにレクチャーを行うことができた。

続いて、実際に作成した地図を手に現地を歩くフィールドワークを行った。長久手は起伏の多い丘陵地帯にあり、その地形は車では意識できないが、歩くと強く実感できる。明治期以前の長久手の景観は、この複雑に凹凸を繰り返す自然地形に見事に対応していた。旧道や旧河道・水路、旧集落、溜池、旧地名などは、今では新しい住宅の間に埋もれて目立たなくなってしまっているが、地図を片手に丁寧に歩くことで、このような旧地形・旧景観の痕跡をいくつも「発見」できる。まず、古戦場公園に建つ近世の史跡記念碑を見学し、その歴史的意義を紹介した後、丘陵地形を確認しながら、合戦にまつわる伝承の残る血の池に向かった。血の池は現在では埋められているが、周囲から落ち込む形は見事に現在でも残っている。その後、「長久手」の地名の由来とも言われる細長く延びる谷地形を確認し、戦国・近世の長久手の村と城がどのような地形条件に対応していたかを現地で考えた。続いて、村の氏神であった景行天皇社と合戦の戦死者を祀る常照寺、合戦時に家康が陣を置いたとされる富士浅間社を訪ねた。このとき、地図上で復原した旧道を通り、合戦時の秀吉方・家康方の行軍ルートが、どのような地理条件を戦略的に選択していたかを、今の風景を見ながら考えた。最後に、現在の町役場のある旧岩作村まで歩き、ここでも中世の集落と城との位置関係や地形条件を説明し、川向こうの長久手と景観比較を行った。狭い範囲ではあったが、旧道や旧地形が明確に残る場所を選んで、行ったり来たりを繰り返したために、休憩を含めておよそ3時間のフィールドワークとなった。ここでも、参加者の方々のご協力のおかげで、予定していたコースを全て楽しく歩くことができた。

フィールドワーク終了後、懇親会を催していただき、研究会の感想やご意見を多くうかがうことができた。内容を詰め込みすぎたために、場所ごとの説明が不十分であったり、歩くペー

スが早かったりした点は反省すべきであるが、多くの参加者に楽しかったとの感想を頂き、肩の荷が降りる思いであった。私にとっても、授業以外に、このような地域の歴史地理の説明と現地見学の機会はほとんどなく、限られた時間内でどのようなレクチャーとフィールドワークを行えば有効なのかを知ることでできた貴重な機会であった。後日、長久手郷土史研究会の方々から長久手合戦の歴史について詳しくご教示いただく機会を得て、自分の説明した知識がまだ浅薄であることを痛感した。地元研究者との連携のもと地域研究を進めることも、今回の研究会で得た課題の一つである。

歴史は遠い過去の物語ではなく、今の地域社会や景観の中に確実に生きている。私の専門とする歴史地理学は、それを具体的かつ論理的に解明する学問であるが、今回の研究会は、こういった大学での学術的視点と成果を、地域社会に還元するために、具体的には何ができるのかを強く考えさせられた。それと同時に、参加された方々にも、長久手以外の日常の風景の中にも色濃く残る地域の歴史が、いかに現在の私たちの生きる社会と結びついているのかに気づき、再考する機会としていただければ幸いである。

最後に、このような貴重な研究会を設定し、丁寧なサポート・準備をしていただいた、地域連携センターと公共政策研究会の方々、当日熱心にレクチャーと現地見学に参加していただいた方々に厚く御礼申し上げたい。
(日本文化学部歴史文化学科 山村 亜希)

長久手の史跡をめぐるのにふさわしい、とても穏やかな気候の中で行われた公共政策研究会には、教職員を中心に関心を持つ多くの参加が見られた。まず、山村先生のわかりやすいレクチャーにより、参加者全員が長久手の史跡に関する地図を色鉛筆で作成し、その地図を片手に主な史跡をたどるフィールドワークが行われた。

これまで、リニモの上から眺めているだけだった長久手の歴史の厚みを深く感じ取ることができる体験となっただけでなく、長久手町との歴史・観光をめぐる連携の可能性が見いだされたように思われる。実際、『中日新聞』の記事が出た直後に、長久手町の郷土史研究会の方から問い合わせがあり、今後の展開に向けすばらしいスタートだったのではないだろうか。

また、こうした取り組みは、地域連携とともに、県立大学の在生にとっても、大学の所在地を知るとてもいい機会になるのではないかと感じられた。1年生のガイダンスや、交流会などでも取り入れることができそうだ。
(地域連携センター長補佐 松宮 朝)

第2回 公共政策研究会 実施結果

1. 開催日時 平成21年12月6日(日) 13時30分～16時30分
2. 会場 講堂
3. 参加者数 約170名
4. 主催 愛知県立大学地域連携センター、愛知県精神保健福祉センター
5. タイトル 「ひきこもりを考えるセミナー」
第1部：基調講演
「ひきこもりとつながり」～居場所が生み出す「ちから」～
講師 長谷川俊雄 教育福祉学部准教授
第2部：トークセッション
「ひきこもりと居場所」～わたし、家族、社会とのつながり～
ゲスト 諏訪真美氏(愛知淑徳大学教授)
川副 崇氏(ほっとプラザ相談員・ひきこもり経験者)
長谷川俊雄氏(愛知県立大学准教授)
ホスト 守屋小百合氏(愛知県精神保健福祉センター)

【当日の写真】



【コメント】

公開シンポジウム「“社会的ひきこもり”を問い直す」(生涯発達研究施設主催)を今までに7回開催してきた。今年度は、愛知県精神保健福祉センターが主催してきた「ひきこもり支援セミナー」と合同で開催したいという提案を受けて共同開催となった。筆者が精神保健福祉センター業務に日常的に参画させていただいたことが契機となり実現したものである。日常的な地域連携によって生まれた信頼関係によって、今回のセミナーが共同開催として実現されたことの意義は大きい。目的や理念の共有、利害一致といった合理的な側面だけではなく、日常的な協力と協働をおして築かれたパートナーシップによるセミナーの開催は、運営の円滑さと成果の共有を生み出したと言えるだろう。「ひきこもり」支援にとって重要な意味を持つとされる「居場所」については、今まではイメージとして語られることはあったが、具体的に多面的に議論される機会はなかった。その点からも、セミナーの成果は愛知県における「ひきこもり支援施策」の拡充に貢献できたものと考えている。

地域連携センターのご理解とご協力をいただいたことに感謝申し上げます。また、愛知県精神保健福祉センターの職員の方々、および司会・会場整理を担当して下さったゼミ学生とゼミ卒業生の皆さんに感謝申し上げます。(教育福祉学部社会福祉学科 長谷川俊雄)

第1回文理連携研究会 実施結果

1. 開催日時 平成21年7月29日(水) 15時00分～17時00分
2. 会場 S棟101教室
3. 参加者数 約120名(うち教職員24名)
4. 講師 エドガー・W・ポープ 外国語学部准教授
5. 進行 成瀬 正 情報科学部教授(文理連携研究会座長)
6. タイトル 「オンデマンド形式の授業」
—英語で学ぶアメリカの文化・地域・エスニシティ・音楽—

【当日の写真】



【コメント】

予想以上にたくさんの方々が参加されて、オンデマンド授業に深い関心を示して下さいました。教員だけではなく特に情報科学部の学生からも、オンデマンド授業に伴う問題点や改善の可能性について鋭い指摘と質問をいただき感謝しています。

(外国語学部国際関係学科 エドガー・W・ポープ)

Edgar Pope 先生は、民族音楽の研究者であるが、コンピュータにも造詣が深く、大学時代はコンピュータも学ばれたとのことである。加藤史朗地域連携センター長に紹介されてはじめてお会いしたときには、流暢な日本語に驚いたものだ。そんな Pope 先生であるから、面白いユニークなお話が聞けるであろうと期待してこの日を迎えた。事前のポスター(P.60参照)の効果か、会場は大入りとなった(写真右)。

講演は、オンデマンド形式の授業ということで、インターネットを駆使して、遠隔授業を行っていることの紹介、また、その実例の紹介であった。これは、先生の前任校である北星学園大学と早稲田大学の間で実施されているものである。お話の中では、米国東南部アパラチア山脈の麓の民族音楽の紹介が印象的であった。

インターネットを使ったオンデマンドの教育は、学生と教師が直に対面していないため、学生の興味をどのようにひきつけるかが課題だと思うが、その点教材の工夫や話し方の工夫など、種々の工夫が随所に見られた。今後のオンデマンド教育の一雛形となるものと思われる。

(文理連携研究会座長 成瀬 正)

第2回文理連携研究会 実施結果

- 開催日時 平成22年3月6日(土) 13時00分～15時00分
- 会場 学術文化交流センター 文化交流室A・多目的ホール
- 参加者数 約120名(うち教職員10名)
- 進行 成瀬 正 情報科学部教授(文理連携研究会座長)
- タイトル 「ロボカップ小型リーグのロボット技術」 ―ロボット技術と文理連携―
- プログラム

13:00-13:20	Owaribito-CU チームのシステム	城尾将史(中部大学)
13:20-13:40	KIKS チームのシステム	服部久善, 手島脩介 (豊田工業高等専門学校)
13:40-14:00	ODENS チームのシステム	中島 誠(大阪電気通信大学)
14:00-14:20	RoboDragons チームのシステム	成瀬 正(愛知県立大学)
14:20-14:40	fWing207 チームのシステム	加藤祥治(電気通信大学)
14:40-15:00	Discussion	

【当日の写真】



【コメント】

今回の文理連携研究会は、ロボカップ小型リーグの研究会との共催である。まず、ロボカップを簡単に紹介する。ロボカップは、「RoboCupは、ロボット工学と人工知能の融合、発展のために自律移動ロボットによるサッカーを題材として日本の研究者らによって提唱されました。西暦2050年「サッカーの世界チャンピオンチームに勝てる、自律型ロボットのチームを作る」という夢に向かって人工知能やロボット工学などの研究を推進し、様々な分野の基礎技術として波及させることを目的としたランドマーク・プロジェクトです。現在では、サッカーだけでなく、大規模災害へのロボットの応用としてレスキュー、次世代の技術の担い手を育てるジュニアなどが組織されています。」とそのHP^{*1)}に述べられているように、大きな目標を掲げたプロジェクトである。Worldwideな組織であり、毎年世界大会が開催されている。ロボカップにはいくつかのリーグがあり、ロボカップ小型リーグは、やかんだの大きさのロボットが5台一組でサッカーを行うリーグである。完全コンピュータ制御が特長で、試合中は人間は手を出すことができない。このようなシステムを自律型システムと呼ぶが、自律型システムは、今後の社会において極めて有用な役割を果たすものである。

今回は、ロボカップ小型リーグに参加している日本の5チームにそれぞれのシステムの構成についてお話していただいた。各チームそれぞれが工夫しているところを話していただくと共に、人工知能の観点から、協調動作や連携動作の実現法などについて話していただいた。話は、技術的側面に偏ったことは否めないが、文理連携の観点からも応用面に関して議論がはずんだ。

実際、ロボカップの技術が、社会に還元されるためには、このような文理連携の側面からの議論が極めて大切であることを改めて感じたしだいである。議論に参加していただいた方に御礼申し上げたい。

(文理連携研究会座長 成瀬 正)

*1) <http://www.robocup.or.jp/about.html>

第1回環境共生研究会 実施結果 (多文化共生研究所との合同研究会)

1. 開催日時 平成21年12月2日(水) 16時10分～18時00分
2. 会場 学術文化交流センター 文化交流室 A
3. 参加者数 24名
4. 報告 ○エドガー・ポープ「アラビアの唄」

戦前日本に輸入されたエキゾチックなジャズ・ソング「アラビアの唄」を戦前日本のポピュラー音楽へのアメリカ製エキゾチズムの影響の一例として紹介。

○木下郁夫「イスラエル・サマースクール体験記」

イスラエルのキブツ、聖地、大地を夏季研修プログラムに参加した日本人学生たちと巡りながら中東の人間と社会を考察。

○稲村哲也「ヒマラヤ諸地域の環境利用と社会情勢」

ネパール・ブータン・インド(アルナチャル)における環境共生・環境利用の形態について比較し、複雑な国際関係・国内事情の概況についても紹介。

【当日の写真】



【コメント】

本学に赴任してから数カ月、日本戦前ポピュラー音楽におけるエキゾチズムの研究を多文化共生研究所と地域連携センターの皆さんに紹介する機会をいただきうれしく思っています。木下先生のイスラエル体験記と稲村先生の南アジアにおける環境共生についての発表と並んだので、広い範囲にわたる研究会になりました。

(外国語学部国際関係学科 エドガー・W・ポープ)

第2回環境共生研究会 実施結果 (多文化共生研究所との共催)

1. 開催日時 平成22年1月22日(金) 14時30分～17時40分
2. 会場 講堂
3. 参加者数 約400名(一般、教職員・学生含む)
4. タイトル **COP10パートナーシップ事業:「自然との共生:アイヌ(人間)のこれまでの生き方、これからの生き方」(地球を考える 日本を考える 生き方を考える)**
第一部 ライブ:ユーカラ&トンコリ演奏
ユーカラ・歌:結城幸司
トンコリ演奏:福本昌二
第二部 フォーラム:「先住民族と生物・文化多様性」
山田 勇(京都大学名誉教授・日本熱帯生態学会会長)
本多正也(「シサム(良き隣人)を目指して」調整委員)
コメント:結城幸司、福本昌二
座長:稲村哲也 外国語学部教授(多文化共生研究所長)

【当日の写真】



【コメント】

約400名が参加し、第一部では、アイヌのお二人のユーカラとトンコリ演奏の癒しの調べに酔いしれ、第二部では、世界中の森と先住民族の暮らしを見てこられた山田勇先生とアイヌ支援の市民活動をしてこられた本多正也さんの説得力のあるスピーチをお話いただき、アイヌの立場からの感想を結城さんに話していただいた。この企画は、2010年10月のCOP10(生物多様性条約締約国会議第10回)、またその機に本学での開催を計画している国際フォーラム等のプレ・イベントとして実施した。
(環境共生研究会座長 稲村哲也)

学生ボランティア・シンポジウム 実施結果

1. 開催日時 平成21年10月31日(土) 10時30分～12時00分
2. 会場 学術文化交流センター 多目的ホール
3. 主催 愛知県立大学地域連携センター
4. 参加者数 42名
5. 参加グループ

スクール・ボランティア 瀬戸市外国籍児童・生徒支援 英語活動のスクール・ボランティア あいちフレンドシップフェスタ 社団法人C I S V日本協会東海支部	社会起業支援サミット 2009in 愛知 国際ボランティアサークル Ruff 障害児問題研究会 子どものひろば
---	--
6. ゲスト 特定非営利活動法人NICE(日本国際ワークキャンプセンター) 矢野淑恵さん(本学卒業生)

【当日の様子】

(左: 司会 平石さん 右: 矢野さん)



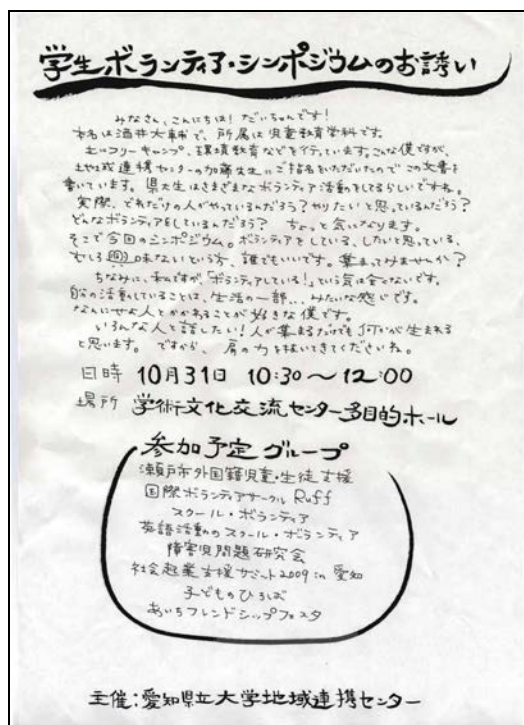
(参加グループ代表者)



(参加者集合写真)



(案内チラシ)



【コメント】

「学生主体」が今年度の地域連携の最大のテーマである。このようなテーマ設定にした最大の理由は、教員主体で企画したイベントに学生を無理矢理「動員」してきたのではないかと、これまでの地域連携のあり方に対する反省がある。このような反省にもとづき、「学生主体」という意味を最大限尊重するという形で、「学生主体」が最も発揮されている学生ボランティア活動を紹介してもらい、活発な学生間の交流を促進し、今後の活動を進めていく上で役に立つようなシンポジウムはできないかと考え、この企画が立ち上がったのである。

もちろん、これはこちらの一方的な思いだったのかもしれない。学生ボランティアに対して何が出来るといえるのか？結果として、こちらが企画した学生「主体」のシンポジウムに「動員」してしまうことになるのではないかと。実は、こんな危惧を抱きながらの出発だったが、当日のシンポジウムで、こうした思い込みがいかに傲慢だったのかに気づかされることになった。

シンポジウムに参加した学生ボランティアの報告者は、それぞれの強い気持ちに裏打ちされた個性的な報告で活動の様子を伝えていた。当日、どうしても報告したいという飛び入り参加もあり、たいへん盛り上がりのある会だったといえる。何よりも象徴的だったのは、このシンポジウムの司会・進行も、スペイン学科在学生の平石氏が名乗り出て、担当してくれたことだ。シンポジウムすべての面で、「学生主体」になったのである。

今後ともこういう形で学生ボランティアの交流ができればいいと思うと同時に、地域連携事業や他の様々な活動を企画する段階から、もっと学生とともに意見交換を進めていくことが必要ではないかと痛感させられた。つまり、教員主体のシンポジウムへの学生参加、大学祭など学生主体の行事への教員参加という形ではなく、教員と学生が同じ机で企画することができないか、ということだ。その接点として「学生ボランティア」が重要な存在であることを今回のシンポジウムは証明したと考えている。そして、今後の「学生主体」の地域連携を考える上で大きな可能性を示したのではないだろうか。 (地域連携センター長補佐 松宮 朝)

3. 2 連携・協力事業

「あいち地域づくり連携大学」実施結果 (愛知県地域振興部との共催)

1. 開催日及び主な内容

	開催日	項目	内容
第1回	10/ 6(火)	開講式	趣旨説明、地域振興部次長・県立大学学長挨拶等
		開講記念講演	中田 實 愛知江南短期大学学長 中沢卓実 常磐平団地自治会長
		交流会	場所：県立大学生協
第2回	11/13(金)	ワークショップ	課題の洗い出し、問題解決に向けた事例紹介（2例程度）、課題に対する解決方策の検討、発表資料作成 コーディネーター： 愛知県立大学教育福祉学部 松宮 朝 准教授
第3回	11/27(金)		
第4回	12/18(金)		
第5回	1/22(金)	成果報告会	課題に対する解決方策の発表
		修了式	修了証授与

2. 会 場 第1回：学術文化交流センター多目的ホール 第2～5回：県立大学サテライトキャンパス

3. 参加者 第1回：70名（そのほか学生約20名）第2～5回：32名（修了証授与者数）

4. 事業の様子

【中田氏講演】



【ワークショップ】



【成果報告会】



【修了式授与】



「平成21年度愛知県地域づくり研修交流会」実施結果 (愛知県地域振興部との共催)

1. 開催日時 平成22年2月5日(金) 14時00分～17時00分
(17時30分～19時30分まで交流会)
2. 会場 学術文化交流センター 多目的ホール (交流会は大学生協食堂)
3. 参加者 99名
4. 研修交流会
 - ①アトラクション (愛知県立芸術大学生による弦楽三重奏)
 - ②平成21年度愛知県地域づくり活動表彰式及び事例発表
江南市国際交流協会、小牧市女性の会
 - ③愛知県立大学地域連携センターの活動紹介
松宮 朝 (県立大学地域連携センター長補佐)
 - ④講演「地域の力 ～これからの地域づくりに向けて～」
長谷川 幸介氏 (茨城大学生涯学習教育研究センター准教授)

5. 会場の様子

【アトラクション】



【事例発表】



【活動表彰式】



【長谷川氏講演】



「にほんの里フェスタ」実施結果

1. 開催日時：平成21年4月18日（土）10時00分～17時00分
2. 主催：森林文化協会
3. 共催：朝日新聞社、愛知県立大学
4. 会場：愛知県立大学長久手キャンパス
5. 来場者：約2,000名

【里のばっちゃんサミット】



【ばっちゃん里めし祭り】



【キャンパス内】



【チラシ】



おろしゃ会講演会 実施結果

1. 開催日時 平成21年10月31日(土) 15時00分～17時00分
2. 会場 学術文化交流センター小ホール
3. 主催 おろしゃ会 (共催: 愛知県立大学地域連携センター)
4. 講演 加藤晋先生基金記念シンポジウム
「地域連携を通して見た日露関係史」
～日本とロシアー若い世代へー歴史学の立場から～
5. 講師 原 暉之先生 (北海道大学名誉教授・北海道情報大学教授)
6. 参加者数 61名

【会場の様子】



【コメント】

一サークルの企画を大学との共催行事とするのは、不当ではないかと疑念を持たれる方がいらっしゃるかも知れない。しかも地域連携センター長が顧問を務めるサークルだと知って、憤りを感じずる方もおられるかも知れない。だからきちんと弁明をしておきたい。

一昨年春、名古屋市の開業医・加藤 晋先生が愛知県立大学に來られ、「おろしゃ会」に多額の寄付をされた。先生はその後、間もなく他界された。「おろしゃ会」は、その寄付金を「加藤 晋先生基金」として、大学との共催行事に使うことにした。こうして企画されたのが、昨年の亀山郁夫先生(東京外語大学長)を招いたシンポジウム「日本とロシアー若き世代へー文学の立場から」である。今年は、「歴史学の立場から」として、元県立大学教授の原 暉之先生(北海道大学名誉教授)をお招きした。原先生と同僚であった高島忠義副学長の挨拶の後、「地域連携を通して見た日露関係史」というテーマで講演をしていただいた。先生のお話しは、国家対国家という枠組みでは見落とされてしまう「歴史」を追求する意欲的なものであった。シンポジウムというからには、先生の講演だけで終わるわけにはいかない。本学の非常勤講師半谷史郎先生のご尽力もあって、静岡県立大の西山克典先生、大阪大学の竹中浩先生、神戸市外大の高橋一彦先生など、ロシア史研究の第一線で活躍する専門家たちの参加が得られ、活発で有意義な討論が行われた。次のサイトには、先生方から寄せられた感想がアップロードしてあるので、ぜひご覧いただきたい。

(地域連携センター長 加藤 史朗)

<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/~kshiro/orosia16-6.html>

リニモねっと講演会 実施結果

1. 開催日時 平成21年11月29日（土）14時00分～15時30分
2. 会場 学術文化交流センター 多目的ホール
3. 主催 リニモねっと（共催：愛知県立大学地域連携センター）
4. 講演 「環境にやさしい交通まちづくり講演会」
テーマ 人と環境にやさしい交通まちづくりとリニモ
5. 講師 松本幸正氏（名城大学理工学部教授）
6. 参加者数 約50名

【会場の様子】



【コメント】

本講演会のあと、平成22年3月まで、6回にわたり「リニモとことん語る会」が開催された。これは、NPO法人「リニモねっと」の代表島田善規氏によって企画された取り組みであり、公募によって選ばれたメンバーが、リニモに関する様々な立場から意見をぶつけあい、リニモの今後のあり方に対して提言を行うというものである。地域連携センターからは松宮が参加し、また、愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科3年生の加藤沙耶花氏、金本祐季氏も、愛知県の事業である「学生によるリニモ沿線まちづくり調査研究・提言事業」の一環として参加した。

ここでの成果は2点にまとめることができる。

第1に、多様な参加者の集まる場での議論の重要性である。たとえば、リニモに関する議論といえ、各種メディアや、議会などでは、黒字／赤字、存続／廃止といった一見わかりやすい二項対立図式に基づく論争が進みがちである。しかし、リニモを利用する立場、リニモによるまちづくりを志向する立場、リニモ財政を憂慮するそれぞれの立場からは、こうした二項対立図式に還元されない思いがあるはずだ。会では、こうした思いを議論する上で重要な情報を共有しつつ、硬直化しつつある枠組みを解きほぐし、あらたな議論の場が設定されたのではないかと感じられた。

第2に、「合意形成」という手法である。これは、特定の目的（たとえば、リニモの存続を至上命令とする）を実現するためではなく、あくまでもその場の参加者間での合意可能な領域を増やすことが目的である。確かに、様々な意見が出てくるため「合意形成」は極めて困難であるが、「大学・地域連携学生定期」、リニモ駅に「地域連携情報コーナー」の設置など、いくつか取り組みを進めることが可能な合意事項もでてきた。こうした「合意形成」の手法は、市民による政策提言を実施する上で欠かせないスキルであるとともに、今後の大学の地域連携を進めるためにも示唆に富むものと考えられる。

（地域連携センター長補佐 松宮 朝）

「ケルンの風」県立芸術大学との連携事業 実施結果

開催日時：平成21年5月11日（月）18時00分～19時30分

会場：愛知県立大学 講堂

来場者：約60名

ヤミナ・ゲール(ピアノ)



ユタ・オウナプー(ヴァイオリン)



レナ・ヴィンヨーザプトロ(チェロ)



「ジェイク・シマブクロ氏講演会」実施結果

開催日時：平成21年4月22日（水）16時10分～17時40分

主催：アメリカンセンター

共催：地域連携センター、教育研究センター、高等言語教育研究所

会場：学術文化交流センター 多目的ホール

来場者：約100名

【ジェイク・シマブクロ氏講演】



「あいちワールド・フレンドシップ・フェスタ」実施結果 (県国際課との連携事業)

1. 開催日 平成21年10月10日(土)、11日(日)
2. 会場 愛・地球博記念公園
3. 内容 市町・市町国際交流協会・国際交流市民団体・地元NGOが、交流のあるフレンドシップ国の生活・文化・自然・生物多様性を体験型のブースで紹介し、また、JICA中部と国際連合地域開発センターが国際理解に繋がる出展をした。そのなかで、本学学生は竹や蜜蝋を使って生物多様性の理解に繋がるブースを設けた。
4. 会場の様子

【県大ブース】



【染めもの】



【みつろう加工】



連 携 活 動 結 果

1. 行事名 愛知教育大学地域連携フォーラム2009
テーマ「大学間連携における地域貢献のあり方」
2. 開催日時 平成21年12月5日(土) 10時00分～12時30分
3. 会場 愛知教育大学第二共通棟(フォーラム、パネル展示)
4. 主催 国立大学法人愛知教育大学地域連携センター
5. 参加者数 約100名(教育関係者、県教委等)
6. 本学出席者 加藤史朗地域連携センター長(パネリスト)
国際ボランティアサークル Ruff (学生による地域連携活動実践報告)
(外国語学部スペイン学科3年 羽田野真帆、青木沙恵子)
7. 当日の様子

【パネルディスカッション】



【学生による活動実践報告】



3.3 その他

県大ファンファーレ2009特別企画 実施結果

1. 開催日時 平成22年1月12日(火) 14時30分～16時00分
2. 講演名 「多文化共生社会とこれからの大学」
3. 講師 姜尚中 東京大学大学院教授
4. 会場 講堂
5. 聴講者数 約900名(一般:約350名、教職員・学生:約550名)

【講演する姜尚中氏】



【コメント】

昨年度から始まった「県大ファンファーレ」というイベントの特別企画として、今年度は、東京大学の姜尚中先生の講演会を開催した。姜先生の話をもっと聞かせたいというのが、佐々木学長の希望であった。夏休み前に、知人の柴宜弘氏を介して照会をし、先生の内諾を得た。その後、佐々木学長からの手紙を添えて正式に講演依頼をした。ファンファーレ実行委員会が組織され、原潮巳先生が委員長となった。委員は私のほかに当日司会を務めた杉原周治先生、渡辺事務局長、太田課長、波多野主査である。地域連携センターは、裏方の仕事をした。全く偶然のことだが、杉原先生は、東大大学院において姜先生の同僚であったことが分かった。おかげでその後の姜先生との連絡がずいぶんスムーズに行った。原委員長は、リニモや地下鉄の駅にポスターを貼るなど、精力的に広報活動を行った。おかげで当日の会場は、満員となった。

先生の講演は、日本と韓国の社会が抱える病弊を指摘したものであった。両国の大きな共通点は自殺率の高さである。しかも一様にみな「すみません」という言葉を残して自殺するのである。地域社会が空洞化し、「自己責任」という圧力の下で、人は孤立無援となっている。こうした冷たい社会にあるのは、貧乏ではなく、「貧困」であるとして、「反貧困」の運動をしている湯浅誠氏の話もされた。結びとして、新しい「絆」を考えることが大切だと力説された。

(地域連携センター長 加藤 史朗)

4 産学連携推進室

この一年を振り返って

産学連携推進室長 井手口 哲夫

平成21年度、加藤史朗地域連携センター長から産学連携推進室長を仰せつかり、産学連携推進室の要綱に記載されている産学連携の推進、共同研究等の窓口業務、知的財産に関する支援業務などを中心に組織的に推進する役としてこの1年間を振り返ってみると、反省の念に駆られる思いがいたします。この産学連携推進室は、名称が示しているように本学と産業界を中心に連携することが目的であります。従来の経緯から上記に示した前者2つの業務については、教員サイドは主に情報科学部、事務サイドは複数の部局などが関連し、進められております。

平成21年度の産学連携推進室の主な活動は、本学に独立行政法人工業所有権情報・研修館から知的財産アドバイザーを顧問として受け入れ、知的財産に関する支援業務のあり方およびその組織体制の検討を開始したことです。具体的には知的財産の管理体制に向けて3カ年の実施計画を作成し、この中で4つの大きな項目を立てました。これらの項目は、「体制の整備」、「研究の顕在化」、「知財の管理」および「人材育成・教育」からなり、また各項目に対して幾つかの検討すべき課題を列挙しています。

特に、知的財産アドバイザーの助言のもと本学の5学部・4大学院研究科の特性を考慮し、知的財産が発明にのみ対応するのではなく、大学における研究活動として生み出される全ての「知的な資産」を対象とすることを踏まえて実施計画を立案しました。

この実施計画を推進するために、かつその実施の一貫として平成21年9月に「知的財産管理体制構築準備委員会」を発足させ、その検討結果を報告書としてまとめました。この報告書は、第1編として実施計画に示した4つの項目に関して各チームを構成し、それぞれのチームの検討内容を、第2編として平成21年度に本学に着任された知的財産アドバイザーから本学の知的財産体制構築・管理・運営等に関する課題をまとめております。

大学における研究活動等によってもたらされる成果は、教育の質的向上へ、更なる研究内容の高度化・発展に向けて大学内において有機的に活用されています。産学連携推進室として、さらにその研究成果を地域連携との関係を含めて、大学、すなわち知の拠点における「知的な資産」の活用の推進の一助となればと考えます。今後の本学あるいは法人における「知的な資産」の管理とその活用への更なる展開につながれば幸いです。

愛知県立大学産学連携推進室要綱

(趣旨)

第1 この要綱は、愛知県立大学地域連携センター規程第10条第2項に基づき、地域連携センター（以下「センター」という。）に設置する産学連携推進室（以下「推進室」という。）について、必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2 推進室は、産学連携活動を円滑かつ組織的に推進することを目的とする。

(業務)

第3 推進室は、その目的を達成するために、次に掲げる業務を行う。

- (1) 産学連携を推進する事業の企画・実施及び広報
- (2) 共同研究等の窓口業務
- (3) 知的財産に関する支援業務
- (4) その他室長が必要と認める業務

(組織)

第4 推進室は、次の者をもって組織する。

- (1) 室長
- (2) 地域連携センター長
- (3) 地域連携センター長補佐
- (4) 情報科学部選出教員
- (5) 室長が指名する事務職員
- (6) その他室長が必要と認めた者

2 室長は、地域連携センター長が前項第2号から第4号に掲げる者の中から指名する。

(顧問)

第5 推進室に、顧問を置くことができる。

2 顧問は、産学連携に高い見識を有する学外者の中から地域連携センター長が委嘱する。

3 顧問は、推進室の活動に対して助言を行うとともに、学外の機関等との渉外にあたる。

4 顧問の任期は、1年とし、再任を妨げない。

(庶務)

第6 推進室の庶務は、庶務課の協力を得て研究支援・地域連携課が担当する。

附 則

この要綱は、平成21年4月1日から施行する。

産学連携推進室運営会議名簿

所 属	平成21年度運営会議氏名
室長（情報科学部選出）	井手口 哲夫
地域連携センター長	加藤 史朗
地域連携センター長補佐	福沢 将樹
地域連携センター長補佐	松宮 朝
地域連携センター長補佐	小栗 宏次
看護実践センター長	岩瀬 信夫
地域連携センター長が指名する事務職員	伊藤 祐司

顧問（大学知的財産アドバイザー）	吉田 公生
------------------	-------

学内知的財産セミナー 実施結果

1. 開催日時 平成21年7月15日(水) 13時30分～16時30分
2. 会場 学術文化交流センター 小ホール
3. 参加者数 約80名(教職員約40名、学生・院生約40名)
4. 次第
 - ① 学長講話(佐々木雄太学長)
 - ② 基調講演(特許庁特許審査第二部長 新井正男氏)
「大学における知的財産について」
 - ③ 講演(本学知的財産アドバイザー 吉田公生氏)
「大学の生み出す知的な資産の活用について」
 - ④ 挨拶(加藤史朗地域連携センター長)

【学長講話】



【新井氏基調講演】



【質疑】



【吉田 AD 講演】



平成21年度 知的財産管理体制構築 事業計画

愛知県立大学

地域連携センター長 加藤 史朗 印 大学知的財産アドバイザー 吉田 公生 印

本学で創出される研究成果を「知的な資産」として確保し、教育・研究および地域社会への貢献に有効活用する。また、「知的な資産」として活用することにより、研究の一層の加速を可能とし（国家プロジェクト等の共同研究、企業との共同研究及び地域社会との連携プロジェクト等の獲得・推進）大学の特色をより強くし愛知県立大学のブランド力を高めることを目標とする。

知的財産管理部門構築の中期的ビジョンとし3年後(2011年度)にこの目標を実現するため、3カ年の期間をそれぞれ準備フェーズ、試行フェーズ、運用フェーズとし、平成21年度は準備フェーズとして下記の取組みを実施する。

I 知的財産管理体制の整備

本学における知的財産管理に関する現状の課題を明確にし、その課題に向けて組織的な体制を整備するために下記の項目について検討を行う準備委員会を発足させる。

- 知財体制の検討と組織案作成（準備委員会を発足）
- 現状の把握と見直し（他大学の状況把握含む）
- 規程等の見直し・整備
- 共同研究等の契約に対する方針検討（H21年度は個別に対応する）
- 専任者の確保（プロパー職員等の要求）

II 大学の特色の顕在化（大学の特色の再認識とその強化策）

本学において必要となる知的財産管理業務を検討するためには、まず特色ある研究等の顕在化（大学の特色の再認識とその強化策）に向けて次の検討を行う。

- 知的な情報の把握整理
- 特色ある（特色としたい）研究の「見える化」
- 文系及び理系としての知財の位置づけと特色

III 知的財産の管理運営方法とその業務の習得

前述の大学の特色顕在化の検討結果を踏まえて、知財の管理運営方法とその業務の習得に向け、下記の項目について調査・検討を行う。

- 知的な資産の活用方法の検討
- 対象業務の明確化
- 管理業務内容の検討とその習得（外部の研修会などに参加）

IV 人材育成と知財教育（大学全体の意識改革）

人材育成と知財教育（大学全体の意識改革）として次の項目について検討を行い、法人及び大学全体（学生、教職員）の知的財産能力（Intellectual Property Literacy）を向上させ、大学または企業等の研究・開発において知財が解る県大生を輩出することを目標とする。

- 中期的な人材育成（教員、学生、事務員）の目標の明確化
- 学生に対する教育カリキュラムの検討と導入
- 教職員への研修内容検討と実施

大学の基本方針

1. 本学で創出される研究成果を「知的な資産」として確保し、教育・研究および地域社会への貢献に有効活用する
2. 「知的な資産」として活用することにより研究の一層の発展を図り、本学の特色をより強くし、愛知県立大学のブランド力を高める
3. 法人および大学全体の知的財産能力を向上させ、大学等の研究または企業等の研究・開発において知財が解る学生を輩出する

現状と課題

- 1 対象とすべき知的な情報の把握
- 2 知的な資産の活用方法
- 3 知的な資産の管理運営方法と体制
- 4 知的財産能力の教育・研修システムのあり方

一年目 (H21年度)

体制構築準備

二年目 (H22年度)

体制の試行

三年目 (H23年度)

体制の運用

将来(5年後)の姿

I 体制の整備

- 1 知財体制の検討と組織案 (準備委員会の発足) 法人との関係も含む
- 2 現状の把握と見直し
- 3 規程等の見直し・整備の検討
- 4 契約に対する方針検討

「知的資産ポリシー」の設定に基づき、実態に即した規程等の整備と学内周知
法人本部、大学管理部、地域連携センターの連携検討と機能の明確化

知財体制(組織)および規程等による知財業務のルーチン化
知財体制(組織)の推進のための予算措置(確保)

II 研究の顕在化

- 1 知的な情報の把握整理
- 2 特色ある(特色としたい)研究の「見える化」
- 3 文系および理系としての知財の位置づけと特色

対象とする知的な資産に対する収集方法(ルールの検討)と試行
外部競争的資金獲得に向けての学内への情報発信手段の充実化

定常的な知的な資産の収集と情報発信
学内外との連携による特色ある研究の「見える化」と「ブランド力」の向上

III 知財の管理

- 1 知的な資産の活用方法の検討
- 2 対象業務の明確化
- 3 管理業務内容の検討とその習得(研修会などに参加)

発明創出から活用までの管理業務体系の整備
組織(法人・大学)としての著作物の管理・活用までの管理業務体系の整備

知財業務担当者による管理業務の実施と改善点の抽出
法人全体への適用時の課題の整理と検討

IV 人材育成・教育

- 1 中期的な人材育成(教員、学生、職員)の目標設定
- 2 学生に対する教育カリキュラムの検討と導入
- 3 教職員への研修内容検討と実施

教職員への知財研修の実施と外部教育システムの活用
新入生への入門知財教育の実施および研究着手前の知財教育(文系、理系)の実施

知財業務担当者、教職員、学生ごとの知財研修・教育カリキュラムの実施
H25年度新カリキュラムへの導入検討

I 2大学を含む法人としての知財体制(組織、委員会等)の確立と円滑な管理運営の実施

II 文系・理系・芸術系の特色を活かした知的な資産の蓄積と、知的な資産活用による研究の一層の発展(国家プロジェクト等の共同研究、企業との共同研究、地域社会との連携プロジェクト等の獲得・推進)、及び大学のブランド力アップ

III 発明創出・著作物および芸術創作物の管理から活用までの知財管理業務の体系化の確立

IV 教職員・学生に対する知的財産能力(Intellectual Property Literacy)の教育・研修システムの確立

5 看護実践センター

この一年を振り返って

看護実践センター長 岩瀬 信夫

この1年は愛知県立看護大学看護実践センターとしての事業継続から愛知県立大学看護学部及び地域連携センター守山キャンパス支部の看護実践センターへの事業転換のための1年でした。

地域というものをどのようにみるかということについては様々な議論があり、地縁で結ばれた地域、行政区分の地域、職場集団というコミュニティー、思想信条からなるコミュニティー等様々です。地域連携と一言でいっても、その中身は十人十色です。そのような中で、大学や学部の性格によって地域との連携を掲げたときのイメージはそれぞれことなるように思われます。愛知県立看護大学は愛知県立大学看護学部組織替えしようと、看護を通して住民の健康の向上に寄与していくというアイデンティティを持ち、看護界に優秀な人材を供給していくという使命を持った学部です。

看護学部は愛知県立看護大学から伝統を引き継ぎ地域の「看護職のコミュニティー」との連携を主に活動を連携すべく、守山キャンパスで看護実践センターの活動を構築してまいりました。今後ともこの伝統を引き継ぎながら、愛知県立大学の地域連携事業の一翼を担う活動をしてまいりたいと思います。

H21年度 看護実践センター各種セミナー

開催日	種類	講座名	受講料	受講人数
平成21年6月5日	看護研究指導講座	看護研究スキルアップ講座(理論編)① 「看護研究の基礎」 講師:小松万喜子教授 「量的研究におけるデータ分析」 講師:岡本和士教授	5,000円	107名
平成21年6月19日		看護研究スキルアップ講座(理論編)② 「質的研究」 講師:グレッグ美鈴	3,000円	74名
平成21年9月14日 15日		看護研究スキルアップ講座(実践編) 講師:岩瀬信夫 講師:箕浦哲嗣	10,000円	31名
平成21年9月～ 平成22年3月まで		看護研究個別指導(学内教員)	15,000円	7件
平成21年9月1日	教看護育講座	摂食・嚥下フィジカルアセスメントセミナー 講師:鎌倉やよい教授	5,000円	56名
平成21年9月7日		看護コミュニケーションセミナー 講師:中川一郎 三重大学客員教授	3,000円	98名
第1回 平成21年9月26日 平成21年9月27日	CNS フォロー アップ セミナー	精神看護CNSフォローアップセミナー 「シリーズ看護のための認知行動療法セミナー: 認知行動療法とヘルピングスキルの基礎」 講師:遊佐 安一郎 北海道医療大学客員教授	15,000円	17名
第2回 平成21年11月22日 平成21年11月23日		精神看護CNSフォローアップセミナー 「シリーズ看護のための認知行動療法セミナー: 認知行動療法の基礎:うつ病と不安障害を中心に」 講師:遊佐 安一郎 北海道医療大学客員教授	15,000円	11名
第3回 平成22年1月30日 平成22年1月31日		精神看護CNSフォローアップセミナー 「シリーズ看護のための認知行動療法セミナー:パーソナリティ障害 の理解と臨床実践(弁証法的行動療法、スキーマ療法から学ぶ)」 講師:遊佐 安一郎 北海道医療大学客員教授	15,000円	16名
平成21年7月14日		老人専門看護フォローアップセミナー 「認知症・謔妄・不穏のアセスメントと対応」 講師:西山みどり 神戸海星病院看護部長(老人看護CNS)	2,000円	51名
平成21年10月30日		がん看護CNSフォローアップセミナー 「がん患者の精神的苦悩と介入ーライフレビューを中心にー」 講師:安藤満代 聖マリア学院大学教授	2,000円	9名
平成21年10月30日		がん性疼痛看護認定看護師フォローアップセミナー 「スピリチュアルペイン」 講師:小澤竹俊 めぐみ在宅クリニック院長	1,000円	26名
平成22年1月22日	がん化学療法看護認定看護師フォローアップセミナー 「医療現場における抗がん薬による汚染の状況と安全対策」 講師:杉浦伸一 名古屋大学大学院准教授	1,000円	52名	
平成21年10月24日	公開講座	公開講座 「かけがえのない子どもの命を輝かせるために」 講師:岡田由香教授・斉藤美紀・川辺恵美子・あいちCAP	1,000円	20名
平成21年11月7日		公開講座(学術講演会) 「かけがえのない子どもの命を輝かせるために」 講師:丹野かほる 新潟大学教授・柳澤理子教授		11名

6 この一年を振り返って

地域連携センター長補佐（日本文化学部） 福沢 将樹

加藤センター長のもと、補佐の方々と事務の伊藤さん・夏目さんと共に過ごした1年はあっという間に過ぎようとしている。環境共生研究会では多文化共生研究所の方々に助けられ、知的財産の吉田アドバイザーなど、他の方々が有能すぎて、私自身は勉強する一方でアウトプットが足りなかった気がしてならない。皆様方にはこの場をお借りして感謝いたします。

知的財産管理体制の構築、それから公開講座のあり方について揺れた1年であった。産業界のニーズと本学のニーズ、公開講座に参加したい市民の需要と本学の提供できる供給、どこかに相乗効果が期待できればうまくいくのだろうし、制度的な障害（予算の使いにくさ、書類書きの時間、人事等）が多ければうまくいくものもいかないのだろう、と想念は渦巻くばかりでちっとも形にならないままである。

一体「地域との連携」とはどういうことをしたらよいのか。座して待っているだけでは何も得ることはできないのだが、私は心根が卑しいので、人にあげるよりも人からもらう方が嬉しい。研究者は職人気質で、とにかく欲しいものは自分で作りたところがある上に、地域に提供するだけでなく地域から得るものがなければ何もやる気にならないものである。それは名誉とか大学のネームバリューのように実在が実感できるまでに時間のかかるものだけでは不足で、研究上の情報や資料、人的コネクションの拡大はもちろんのこと、やっぱりお金、それも研究費だけでなく人件費である。自前の予算を地域へ向けて環流してだけでなく、外部資金の提供を積極的に求め、それを使いやすい制度作りも必要であろう。

最後に一言。卒業生は財産である。本学を最終学歴として一生を送る“人財”（×人材）を、毎年数百人ずつ地域に送り出しているわけである。地域の企業や役場などの団体との連携も大事だろうが、卒業生との連携も当然地域連携につながるのである。本年度の統合・改組によって大学名や学部学科名が変わったところ、新たに学科を立てたところもあるわけだが、卒業生との繋がりを絶たぬ工夫が必要であろうと考える。また学生が在学中に地域連携の一環として行事等に参加する場合も、学生自身の成長や経歴に寄与するようなものでなくてはならないだろう。

地域連携センター長補佐（教育福祉学部） 松宮 朝

「肖像画に まちがって髭を描いてしまったので 仕方なく髭を生やすことにした
門番を雇ってしまったので 門を作ることにした
一生はすべてあべこべで わたしのための墓穴を掘り終わったら
少し位早くても 死ぬつもりである」(寺山修司『わたしのイソップ』より) (寺山, 1986:176)

そう、この寺山修司の詩のように、すべてあべこべなのだ。

万博会場を作ってしまったので、その跡地利用を考えることにした。リニモを作ってしまったから、乗客を増やす取り組みを考えることにした。大学でもそうだ。中期計画を作成してしまったので、計画に書かれた事業を実施することにした。サテライト教室を作ってしまったから、その利用を考えることにした。900人が入る講堂で講演会を企画してしまったから、学生を動員することにした。

地域連携センターでの仕事も2年目となった。その中でも、2005年に開催された万博後の取り組みである、愛・地球博記念公園関連事業や、リノモ利用促進など、愛知県との連携事業にかかわらせていただくことが多かったように思う。しかし、この2年間、どこか釈然としない気持ちで地域連携の仕事に取り組んでいたのも事実である。愛知県立大学に勤めている立場、地域連携センターで仕事をする立場からは重要な仕事かもしれないが、研究者という立場からすると、正直これでいいのかという気持ちもある。

以前、地域連携事業の一環で実施した万博評価をめぐる地域住民・学生意識調査の分析の中で、万博の成果としては「環境意識」など意識レベルでは高まりが見られるものの、それが実際の生活実感や行動とは乖離している点を指摘したことがある（拙稿、2007）。私はこうした乖離を埋めるための事業に取り組んでいるのではないだろうかとも思うのだ。そして、これは愛知県の意向に沿う形で取り組んだ活動であり、少し古い世代の人からは「御用研究者」という言葉で糾弾されるようなかわり方かもしれないのだ。

振り返ってみると、自らの足下の問題に対して研究者として厳しい生き方を貫かれた先達があった。万博の負の遺産ともいえる愛知県の財政危機の問題に切り込み、愛知県立大学の夜間主廃止問題など大学のあり方に対しても研究者としての批判的な視点に基づく緊張感に満ちた仕事を残された、元愛知県立大学外国語学部教授の早川鉦二先生である（早川、2008）。私も早川先生のように、一定の距離を保ちながら批判的な視点を忘れずに、研究する立場としての生き方を追求すべきではないのか。そして、自分の墓穴を掘らないためには、研究機関としての県立大学の相対的自律性、そして私自身の「能力」など諸「資本」の欠如という、自分自身の社会的世界に対して絶えざるシビアな分析が不可欠である（ブルデュー、1997）。

もっとも、実際に地域連携の仕事にかかわる中でしか見えてこないものもあったように思う。それは、それぞれの事業報告のコメントの部分にも記したことだが、役に立つことか無駄なことか、賛成か反対か、存続か廃止かといった大文字の二項対立図式からはこぼれ落ちてしまうものを、地域での実践に取り組まれている多くの方々と出会うことによって教えていただいたという経験である。大げさに言うのならば、あべこべになってしまっていた地域連携のあり方に対して、地域での実践レベルから裂け目を見いだすことが可能ではないかということだ。だから、墓穴を掘っているわけではないとも思う。強く、そう思う。

地域連携の仕事をもう1年取り組ませていただくことになった。来年度は長久手町で農を中心とした市民活動を中心に仕事を進めていきたいと考えている。加藤センター長はイベント中心の動員型地域連携事業の転換と、学生主体のあり方を打ち出している。思えば私は「補佐」という立場ながら勝手な振る舞いばかりで迷惑のかけ通しであった。今年度は加藤センター長の度量に何度も救われた（恥ずかしい話だが、酔いつぶれて倒れた私の命を救っていただいた、文字通り命の恩人である）。次は自分が恩返しをする番だ。

最後に、無理なお願いにこたえていただいた地域連携センターの伊藤さん、夏目さんに深く感謝したい。

<文献>

寺山修司、1986、『寺山修司全詩歌句』思潮社。

早川鉦二、2008、『愛知万博の落とした影 愛知県立大学に見るひずみと切り捨て』風媒社。

ブルデュー・ピエール（石崎晴己・東松秀雄訳）、1997、『ホモ・アカデミクス』藤原書店。

松宮朝、2007、『「万博」はどのように経験されたのか?』『愛知県立大学文学部論集（社会福祉学科編）』55:127-156。

地域連携センター長補佐（情報科学部） 小栗 宏次

2009年度、加藤センター長を補佐し地域連携センターの活動を御手伝いすることとなりました。地域連携センターがフォローする活動範囲は多岐にわたり、センター長以下、各学部からの補佐に加え事務スタッフ全員で協力して多くの課題に対応してきました。特に本年度は、知的財産に関する本学の今後の方針について研究する機会が持たれ、私もその委員の一人として携わることができたのは幸いなことでした。知的財産と言っても特許のような技術的な知的財産だけでなく、デザインや音楽などの著作権など、文系・理系を問わず、看護や芸術系など、本学の多様な学部構成の中での取り扱いに当初戸惑う事も少なくありませんでした。大学における知的財産の取り扱いに注目が集まる中、本学でもこうした知的財産とどう向き合うかを検討することは重要な事です。2009年度、こうした知的財産の取り扱いに関する報告書をまとめることができたのは評価できると思います。しかし、まだ多くの課題が残されており、今後も引き続き検討されることが望まれます。

地域連携センターの活動を進めるにあたり、地域だけでなく、学内の各学部、研究所等との連携も重要であることを感じました。たとえば、2009年度、私は情報科学共同研究所の所長として、研究所主催のセミナーや講演会を種々実施しました。この際、セミナーや講演会への勧誘なども地域連携センターと協力して実施すると良いと感じました。

少ないスタッフでセンターを運営するため、どうしても多くの行事の中に埋もれてしまうことが少なくありませんが、学内での学部間、研究所間の風通しをよりよくすることで、相乗効果を得ることができるようになれば幸いです。

1年間の地域連携センターでの活動を通じ、これまで学部内では得ることができなかった全学レベルでの種々の課題に触れることができた事は大きな収穫といえます。今後、この経験を生かし、本学の地域連携活動に微力ながら貢献できればと考えています。

今後とも、皆様の温かいご理解とご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、地域連携センターを支えてくださいました関係各位に心から感謝申し上げます。

7 参 考 资 料

7.1 広報資料

【公開講座】

子どもの発達の危機と向きあう

愛知県立大学大学院に、この春新しく、「人間発達研究科」が誕生しました。
この研究科では、子どもの発達の危機に立ち向かい、子どもたちの健やかな
発達をさせるために、理論的、実践的な専門教育・研究を展開していきます。
この講座では、学外講師も交え、この分野の研究の一端を紹介し、子どもと関わる様々な
立場の方とともに、子どもへの発達支援の理論と実践を深めていきたいと思えます。

公開講座 平成21年度前期 愛知県立大学



第1回

〈シンポジウム〉
6月27日(土) 13:30～16:30

テーマ 児童期の身体と運動の発達支援

小学校では運動の「好きな子」「強い子」、「できる子」で
ない子などの他校同僚が差別されていると言われています。
運動生理学(体育科学)、体育科教育、学校体育領域の立場か
ら、児童期の子どもからの運動関与に求められる発達支援を
取り上げ、その解決策について検討します。

第2回

〈講演とシンポジウム〉
7月11日(土) 13:30～16:30

テーマ 困難をかかえた子どもへの理解と支援

現在保育・教育現場で増えているといわれる、育てること、育つ
こと、困難をかかえた子どもと向き合い、そのうち子どもたち
をどのように理解し、支援していったらよいのかを、具体的な事
例を通して検討します。

愛知県立大学 地域連携センター

公開講座 平成21年度 愛知県立大学 ことばの世界・世界のことば

ことばは、単なるコミュニケーションの道具ではありません。ことばのしくみ
をみると、人間精神の深みの不思議の一部を垣見し、またそのことばが関わって
いる社会の一面、そのことばを話す人々の気持も垣見することがあります。
この講座を通して、愛知県立大学で専門的に学ぶことができる外国語の様々な
面白さを知り、ことばについて考えてみましょう。



第1回 10月10日(土) 13:00～16:00

① 英語からことばを考へるー英語から見えることばの構造及び英語学習ー
講師 丸山(英語学) / ジョージ・ピトリック(英語学)

② フォニクスー歴史と地域的多様性ー 講師 藤本(ドイツ語学)

第2回 10月17日(土) 13:00～16:00

③ 漢字と中国人ーその歴史的経緯から見えるものー 講師 青木(中国語)

④ シルクロードの文字をたよるー漢語からソングダイナマを経てインド語に到るー
歴史 講師 中野(中国語)

第3回 10月24日(土) 13:00～16:00

⑤ フランス語を知る、ことばを考へる 講師 野村(フランス語学)

⑥ スペイン語の世界・世界のスペイン語 講師 藤本(スペイン語学)


■会場 名古屋大学豊田校舎 豊田校舎
■参加費 1,000円(資料代) ※資料費
■申込方法 「豊田校舎」(1階豊田校舎) 2階
2階201号室(名古屋大学豊田校舎)に直接お申し込みください。
※申込期間 平成21年9月16日(水)18時
※申込先 豊田校舎 2階201号室
名古屋大学豊田校舎センター
電話 052-731-1514

名古屋大学豊田校舎
http://www.city.nagoya.ac.jp/
愛知県立大学豊田校舎
http://www.aichu.ac.jp/



日本文化の多元性をさぐる

言語・文学・歴史・社会からみる日本文化の研究と発信



講演者

- ① 古代における日本の歴史文化
- ② 戦後における日本の社会文化
- ③ 海外トケルゴ - 日本語の社会研究からみる日本文化
- ④ 異文化からみる日本文化
- ⑤ 異文化からみる日本文化

コメンタリー

- ① 山田 正徳氏
- ② アドヴァンスト
- ③ 一歩の海外公演

2009年11月3日(火)

第1部(午後) 9:30～12:00
第2部(午後) 13:30～16:30

愛知県立大学(長久手キャンパス)講堂

参加費 1,000円(資料代) ※資料費

主催 愛知県立大学(豊田校舎)国際文化研究科(豊田校舎) 国際文化研究科(豊田校舎) 国際文化研究科(豊田校舎)

7.2 過去の公開講座開催結果

愛知県立大学公開講座 年度別開催状況

年度	講座名	講師	開催日
10 (1998)	「日本の文化と生活」 第1回 ①絵巻物にみる平安時代の生活と文化 ②尾張国の中世社会 ―笠覆寺中世文書を読む―	(文学部) 河原 由雄 石川 清之	9月5日(土)
	第2回 ①平安時代の歴史と文化 ②日本の子どものことば生活	福長 進 難波 博孝	9月12日(土)
	第3回 ①日本の伝統的民家と生活 ②漢学・国学・国文学	山田 正浩 堀川 貴司	9月19日(土)
	「アジアの中の中国…一つの文明世界…」	(外国語学部)	
	第1回 ①中国諸地域の活力源 ―一鎮の今と昔― ②香港返還とASEAN華人社会	森 正夫 樋泉 克夫	9月19日(土)
	第2回 ①中国ではどんな言葉が話されているか? ―言語と地域性― ②中国人と『源氏物語』―日中比較文学の視点から―	吉池 孝一 月田 尚美 西村 富美子	10月3日(土)
	第3回 ①アヘンからみた近代の中国と日本 ②「だれが中国を養うのか?」―12億人の食糧問題―	倉橋 正直 若代 直哉	10月17日(土)
	「21世紀の愛知」―「地域・情報・環境」をキーワードに未来を語る	(情報科学部)	11月7日, 14日, 28日 の土曜日3回
	「21世紀の愛知―未来派!サイエンス教室―」	(情報科学部)	
11 (1999)	① 「地球 (Earth) 」 地球の震えをキャッチする	畑 雅恭 田 学軍	7月10日(土)
	② 「身体 (Body) 」 どうしてモノが見えるのか?	神山 齊巳 小濱 剛	7月10日(土)
	③ 「情報 (Software) 」 身の回りのソフトウェア (2000年問題って何?)	山本 晋一郎 鈴木 賢治	7月24日(土)
	④ 「通信 (Communication) 」 ネットワークでコミュニケーション (インターネットで変わる学校)	小栗 宏次	7月24日(土)
	「ドイツ―EU新時代をむかえて―」	(外国語学部)	
	① ドイツと欧州連合 ―歴史的背景と現状―	垂水 節子	9月25日(土)
	② 法的側面から見たドイツと日本とヨーロッパそれぞれの関わり	田中 裕明	10月2日(土)
	③ ドイツの祭り ―西欧諸国との比較を含めて―	スウェン・ホルスト	10月9日(土)
	④ 混迷する現代におけるドイツ思想	宮原 勇	10月16日(土)
	⑤ アイデンティティを求めるドイツ系ユダヤ人たちの自伝文学 ―祖国を追われた人たち―	西谷 頼子	10月23日(土)
	⑥ ドイツ グリム童話のつきない魅力と活躍する動物たち ―赤ずきんと狼を中心に―	可知 正孝	10月30日(土)
	「ことばの化石―言語の歴史への招待」	(文学部)	
	① 日本語―ダイコンあるいはデヤコン	犬飼 隆	11月6日(土)
	② 英語―1頭でも2頭でもdeerなのはなぜ	中村 不二夫	11月13日(土)
③ スペイン語―セルバンテスはドン・キホーテを本当に書いたか	布施 温	11月20日(土)	
④ ドイツ語―英語とは縁続き、でも古風な言葉	松尾 誠之	11月27日(土)	
⑤ フランス語・ラテン語―よみがえる西洋古代・中世	矢島 猷三	12月4日(土)	
12 (2000)	「アジアの演劇、ヨーロッパの演劇―入門編―」	(文学部)	
	① 演劇の始まり ―ギリシャ、中世ヨーロッパ―	磯野 守彦	7月1日(土)
	② 能楽入門	竹内 澄子	7月8日(土)
	③ 歌舞伎・浄瑠璃入門	小谷 成子	7月15日(土)
	④ 京劇の楽しさ	樋泉 克夫	7月22日(土)
	⑤ ドイツ現代演劇 ―上演の架け橋―	四ツ谷 亮子	7月29日(土)
	⑥ シェイクスピアの世界	磯野 守彦	7月1日(土)
	「スペイン・ラテンアメリカの新世紀」―スペイン語圏の過去・現在・未来―	(外国語学部)	
	① スペイン語の過去・現在・未来	佐藤 徳潤 堀田 英夫	9月30日(土)
	② スペイン語圏文学と文化	志賀 一郎 田中 敬一	10月7日(土)
	③ ラテンアメリカの先住民文化とその現在	杉山 三郎	10月14日(土)
	④ 近現代スペインにおける地方制度の形成	山本 哲 (代講)竹中 克行	10月21日(土)
	⑤ グローバル化時代におけるラテンアメリカの政治・経済	小池 康弘	10月28日(土)
⑥ シンポジウム ―スペイン語圏の現在と未来 ―スペイン語とその文化 ―国家とは?スペインとラテンアメリカ ―スペインとEU ―ラテンアメリカと北米 ―アメリカ合衆国におけるスペイン語圏文化	司会:小池 康弘 佐藤 徳潤 山本 哲 竹中 克行 野田 隆 杉山 三郎	11月4日(土)	
「ロボットのサッカーチームを動かす」	(情報科学部)	11月11日~11月25日 の毎週土曜日(6回)	

年度	講座名	講師	開催日
13 (2001)	「響きあう「知」・・・ボーダレス時代の学際的研究の試み・・・」 (大学院国際文化研究科)		
	① 20世紀型政治システム 一<体制再編>への関心から・・・政治学	吉瀬 征輔	6月2日(土)
	② 経済のグローバル化と国際法・・・国際法	高島 忠義	6月9日(土)
	③ 国際化する現代における東アジアの文化・・・文化人類学	稲村 哲也	6月16日(土)
	④ 古代文明における世界観と政治・・・考古学	杉山 三郎	6月30日(土)
	⑤ メディアとしての言語・・・日本語学	犬飼 隆	7月7日(土)
	⑥ グローバル・スタンダードとしての英語・・・英語学	廣瀬 恵子	7月21日(土)
	「子どもと学校の未来をひらく」 (文学部)		
	第1回 今どきの子どもを理解する		
	① 子どものつぶやきに寄り添って	近藤 郁夫	6月23日(土)
	② 非行問題とその対応	堀尾 良弘	
	第2回 家庭・地域と学校の連携		
	① 地域に開かれた学校づくり	川口 彰義 長谷川 真人	7月14日(土)
	② 児童虐待と子どもの権利擁護		
	第3回 教育の隠れた次元～子どもは知らず知らずのうちに学んでいる		
	① 心理学からみた教育の隠れた次元	加藤 義信	9月22日(土)
	② 学校におけるヒドゥンカリキュラムの実際	久保田 貢	
	「コンピュータは予見するーメディアと人と環境」 (情報科学部)		
	第1回 「音 ーその生成と消去」		
	① 音を創る	足立 整治 安川 博	10月27日(土)
	② 音を消す		
	第2回 「人 ーその行動と加齢」		
	① 人と行動	奥田 隆史 戸田 尚宏	11月10日(土)
	② 音を消す		
	第3回 「緑 ーその変遷と地球環境」		
	① 里山の意義	鈴木 康弘 半田 暢彦	11月17日(土)
	② 地球への影響		
	「映画をいかに見るか。いかに読むか。PART I」 (外国語学部)		
	① ドイツ表現主義映画ー人間の『活動写真』上の再生	山本 順子	12月22日(土)
	② メロドラマ・女性・イデオロギー	野沢 公子	
	③ 文学と映画の対話	原 潮巳	12月23日(日)
	④ ロシア文学の再解釈と映画化ー最近の傾向をめぐってー	加藤 史朗	12月24日(祝)
	⑤ 『不可解な他者』表象ーハリウッド映画にみるアジア人ー	村山 瑞穂	
⑥ 映画を読むとはどういうことか	野沢 公子		
「社会福祉と人権擁護」 (文学部)			
第1回 障害と障害のある人への理解 一人権への配慮は障害を知ることから始まるー			
① 多くの種類がある身体障害、原因がわからないことも多い知的障害	吉川 雅博 祖父江 典人	6月9日(日)	
② 心理学からみた心の障害とその理解			
第2回 『ホームレス』と市民 ー可視化する人権ー			
① 「ホームレス」と市民	藤田 博仁 須藤 八千代	6月16日(日)	
② 都市に棲む人々 ー「ホームレス問題」とソーシャルワークー			
第3回 国際化と人権			
① 先進国と開発途上国の課題	佐野 治 佐野 治	6月23日(日)	
② 北欧の高齢者福祉 ー福祉に対する日本と北欧の考え方の違いー			
第4回 医療における人権の過去と現在			
① ”精神病患者”の権利はなかったのか？ーヨーロッパ精神医療史の落ち穂拾い	橋本 明	6月30日(日)	
② インフォームド・コンセントの光と陰	清水 潔		
「フランスー伝統と革新」 (外国語学部)			
第1回 ①2002年フランス大統領選挙とその後 ②バルザック『人間喜劇』	田中 正人 早水 洋太郎	6月15日(土)	
第2回 ①文化史としてのフランス・モード ②ユーロ導入とフランス経済	原 潮巳 野内 美子	6月22日(土)	
第3回 ①パリ施療院の歴史ー「神の家」から市立病院へ ②現代フランス哲学と生命の認識ー正常と異常ー	栖原 彌生 本多 英太郎	6月29日(土)	
「『国際文化』グローバル化と民族アイデンティティ」 (大学院国際文化研究科)			
第1回 ヨーロッパからのメッセージ			
① 現代哲学からのアプローチ ... 「グローバル化する現代と伝統文化」	宮原 勇 田中 正人	11月8日(金)	
② ヨーロッパ政治から見た国際文化			
第2回 アメリカからのメッセージ			
① 「われらのアメリカ」VS「彼らのアメリカ」 ～ラテンアメリカ政治における対米意識～	小池 康弘	11月14日(木)	
② もうひとつのアメリカ、もうひとつのカナダ？ーケベック、女性、移民たち	高井 由香理		
第3回 日本歴史からのメッセージ			
① 日本社会史の現場からグローバルスタンダードを見る	大塚 英二 遠山 一郎	11月21日(木)	
② 日本古代文学から見た国際文化 ー額田王の歌の背景ー			
第4回 「国際化」とは？			
① 情報通信技術と国際性	井手口 哲夫 稲村 哲也	11月28日(木)	
② 環境をめぐる伝統知の再編と世界システム ーアンデスにおける野生ラクダ科動物の利用・保全の事例から			
「一歩進んだパソコン利用」 (情報科学部)			
		11月8日(金)及び 11月14日～11月28日 の毎週木曜日(計4回)	

年度	講座名	講師	開催日
15 (2003)	愛知県の歴史と自然	(文学部)	
	第1回 愛知県の自然		
	① 愛知の自然	山田 正浩	6月14日(土)
	② 愛知の歴史地理 一条里地割とその解釈をめぐって	米家 泰作	
	第2回 愛知県の歴史		
	① 古代 尾張の古代社会 一尾張国税帳の世界一	丸山 裕美子	6月21日(土)
	② 中世 尾張・三河の中世仏教	上川 通夫	
	③ 近世 近世尾張の産業 一瀬戸窯業の展開	大塚 英二	6月28日(土)
	④ 近代 愛知県の産業の発展 一繊維産業を中心に一	石川 清之	
	「パソコンを組み立てて世界とコミュニケーション」	(情報科学部)	
	① 誰にでもできるパソコンの組み立て	辻 孝吉	9月6日(土)
	② パソコンを使ったコミュニケーション	白田 毅	9月13日(土)
	③ 外国とコミュニケーション	布施 温 何 立風	9月27日(土)
	「モンゴロイド古代王朝の宗教と政治」	(大学院国際文化研究科)	
	第1回 新大陸の古代王朝		
	① 中米古代王朝の国家宗教と政治	杉山 三郎	11月1日(土)
	② インカの国家宗教と政治	谷口 智子	
	第2回 東アジアの古代王朝		
	① 書かれた古代中国の宗教と政治	吉池 孝一	11月8日(土)
	② 朝鮮の国家宗教と政治	山田 正浩	
	第3回 古代中国と日本王朝		
	① 中国・朝鮮からの文字需要と日本王朝行政の成立・展開	犬飼 隆	11月15日(土)
	② 古代中国行政・宗教制度の日本王朝への受容と変容	丸山 裕美子	
	第4回 日本古代思想と政治		
	① 東アジアの政治世界と日本古代仏教	上川 通夫	11月22日(土)
	② 日本古代王朝の思想・文学表現形成	遠山 一郎	
	「博覧会の歴史と現在」	(外国語学部)	
第1回 ①ハノーバー万博とその後 ②2000年ハノーバー万博がどのように報道されたか	ホルスト, スウェン イミック, アレクサンダー	11月29日(土)	
第2回 ①明治10年第一回内国勸業博覧会について ②日本文学と博覧会	石川 清之 山口 俊雄	12月6日(土)	
第3回 ①万国博覧会と陶磁技術 ②第一回ロンドン万国博覧会	中野 泰裕※ 大野 誠	12月13日(土)	
		※県陶磁資料館主任学芸員	
「発達と尊厳—21世紀における教育と福祉—」	(大学院国際文化研究科)		
		6月5日～6月26日 の毎週土曜日(4回)	
「コンピュータを操ることば」	(情報科学部)	9月4日、11日、25日 の土曜日(3回)	
「言葉—はっする言葉」	(文学部)		
第1回 ①禁じられた言葉 一近代沖縄における方言札一 ②与えられた言葉 一言語政策としての英語教育一	近藤 健一郎 岡部 純子	10月23日(土)	
第2回 ①「語り」のかたち 一自発的な談話における話し言葉のすがた一 ②引用のかたち 一すべての言葉は潜在的に引用されている一	熊谷 吉治 福澤 将樹	10月30日(土)	
第3回 ①発した声をきく ②人が発する声	吉川 雅博 犬飼 隆	11月13日(土)	
「ことばの万国博覧会—ことばが世界を結ぶ」	(外国語学部)		
第1回 ヨーロッパ館	館長：小柳 公代		
① フランス館	小柳 公代	11月20日(土)	
② カタロニア館	佐藤 徳潤		
③ ドイツ館	宮原 勇		
④ ロシア館	加藤 史朗		
第2回 アメリカ館	館長：杉山 三郎		
① 英語その1	大森 裕實	11月27日(土)	
② 英語その2	盛田 義彦		
③ アメリカインディアンのクリーク語	榑原 千絵 盛田 義彦		
④ ナバホ語	天野 圭子		
④ スペイン語	堀田 英夫		
第3回 アジア館	館長：三宅 康之		
① 中国語・韓国/朝鮮語	鶴殿 倫次	12月4日(土)	
② アラビア語	布施 温		
③ セデック語とアミ語	月田 尚美		
④ インドネシア語	小座野 八光		
⑤ 古代中国の文字	吉池 孝一		

年度	講座名	講師	開催日
17 (2005)	「多文化共生—その理論・政策・現状」	(大学院国際文化研究科)	
	第1回 ①日本人の海外移住：南米ペルーの日本人移民を中心に ②外国人住民と地域の再編・活性化 —愛知県西尾市を事例として	稲村 哲也 松宮 朝	6月4日(土)
	第2回 ①在日韓国・朝鮮人の現状と課題 ②拡大する《中国世界》 —華僑・華人・新華僑と中国 ③ヒマラヤ地域におけるチベット・ビルマ系少数民族	山本 かほり 樋泉 克夫 高橋 慶治	6月11日(土)
	第3回 ①見えない国境、見えない移動 —カナダ・アメリカ国境の越境者たち ②合衆国の先住民政策とインディアン社会 —ナバホ族を中心に ③国民国家インドネシアとエスニシティ	高井 由香理 天野 圭子 小座野 八光	6月18日(土)
	第4回 ①国際政治と多元主義・多文化主義 ②ロシアにおける多文化共生の葛藤 —ユーラシア主義をめぐる議論から— ③参加教員によるディスカッション	佐々木 雄太 加藤 史朗	6月25日(土)
	「コンピュータと表現」	(情報科学部)	10月8日～10月22日 の毎週土曜日(3回)
	「辞書—ことばの万華鏡」	(文学部)	10月29日～11月12日 の毎週土曜日(3回)
	「映画をいかに見るか。いかに読むか。PART II」	(外国語学部)	
	第1回 「映像を読むとはどういうことか」		
	① アニメは映像をいかに変えたか ② 映像スタイルとは何か：世界の映像作家	山本 順子 野沢 公子	11月26日(土)
	第2回 「大衆映画の政治性」		
	① 70年代B級日本映画における政治性・思想的性 ② ロシアン・ブラザー PART I, PART IIに見る暴力の意味	原 潮巳 加藤 史朗	12月3日(土)
	第3回 「文学の映画化」		
	① 『ティファニーで朝食を』の映画化にみる冷戦期アメリカの文化イデオロギー ② 映画化された中国近現代文学作品—原作・映像・観衆	村山 瑞穂 工藤 貴正	12月10日(土)
	シリーズ1「文系と理系の境界の彼方へ—共生社会への貢献の可能性を求めて—」	(3学部合同)	
	I. 「文系・理系が融合するコンピュータ利用の可能性」		
	第1回 多言語社会におけるコンピュータ利用		
① 外国語教育におけるコンピュータ利用 ② 日本語の要約作成におけるコンピュータの利用	布施 温 山村 毅	10月7日(土)	
第2回 文系の学問研究におけるコンピュータ利用			
① 主体的な社会参加のための学校図書館とインターネット ② HP『古代文字資料館』の紹介 —デジタル資料館のこころみ—	木幡 洋子 吉池 孝一	10月14日(土)	
第3回 名古屋弁の音声 —地方文化の文理融合的分析	犬飼 隆 金森 康和	10月21日(土)	
II. 「文化と科学技術の対話」			
第1回 歴史研究・文化研究としての科学			
① ニュートンと錬金術 ② 文学作品としてのバスカルの科学実験	大野 誠 小柳 公代	11月3日(金・祝)	
第2回 ジュラシック・パークを解説する —映画の文理学的分析			
① 映像学の視点から ② ジュラシックパークを生命科学の視点から検証する —実像と虚像—	山本 順子 横田 幸雄	11月11日(土)	
第3回 芸術文化とメディア			
① ヨーロッパ文化における記録メディア誕生の意味 ② デジタルのすさま	原 潮巳 大久保 弘崇	11月18日(土)	
III. 「文系と理系が協働する共生社会のあり方」			
第1回 「科学技術と人間社会」			
① 科学と人間と自然 —ユートピア作品を通して— ② ロボットで共生する社会	小澤 正人 奥田 隆史	11月25日(土)	
第2回 「科学技術と福祉社会」			
① AAC (拡大代替コミュニケーション) 入門 —障害者や高齢者のためのコミュニケーション支援機器— ② ユビキタス時代の高度医療・福祉情報システムの開発	吉川 雅博 小栗 宏次	12月2日(土)	
第3回 「もう一人の私「自己意識のゆらぎ」をめぐる心理学と 文学研究によるジョイント・アプローチ」	加藤 義信 宮崎 真素美	12月9日(土)	
シリーズ2「文化多様性とエスニック共生」	(大学院国際文化研究科)		
第1回 ①生物多様性と文化多様性 —アンデスとヒマラヤから学ぶ ②保留地に生きる米国先住民の現在・・・ナボホ族(ディネ)を中心に	稲村 哲也 天野 圭子	11月10日(金)	
第2回 ①モンゴルの少数民族カザフの移住とエスニシティ ②国際政治と多元主義・多文化主義	スヘー・バットルガ 佐々木 雄太	11月17日(金)	
第3回 ①ニュージーランド先住民マオリの同化と自立 ②拡大する《中国世界》・・・華僑・華人・新華僑と中国	宮里 孝生 樋泉 克夫	11月24日(金)	
第4回 ①在日韓国・朝鮮人の現状と課題 ②外国人住民と地域の再編・活性化 —愛知県西尾市を事例として	山本 かほり 松宮 朝	12月1日(金)	

18
(2006)

年度	講座名	講師	開催日		
19 (2007)	シリーズ1「国際社会を読み解く」				
	第1回	①WTOにおける自由貿易と健康・保護の相克 ②欧州連合（EU）の主要国フランスの進路と国民の選択 －2007年大統領選挙・総選挙をふまえて	高島 忠義 中田 晋自	7月7日(土)	
	第2回	①教科書にみる日中の相互イメージ ②ポスト・カストロ時代のキューバ政治の行方	黄 東蘭 小池 康弘	7月14日(土)	
	第3回	①現代アメリカ企業と経済－コーポレートガバナンスをめぐって－ ②国連、権力闘争の60年史	堀 一郎 木下 郁夫	7月21日(土)	
	シリーズ2「未来観の過去と現在」				
	第1回	①SFやユートピア思想に見る未来像 ②ここはどこへ行くのか	小澤 正人 祖父江 典人	10月20日(土)	
	第2回	①子供の未来－過去と現在－ ②社会保障の未来－過去と現在－	近藤 郁夫 江里口 拓	10月27日(土)	
	第3回	①のぞき見る未来、かいま見た未来－おみくじの中の未来－ ②「未来」を表す言語表現－過去と現在－	大野 出 福沢 将樹	11月3日(土)	
	「万博が遺したもの」				
	第1回	①万博調査について ②万博をふりかえって	松宮 朝 井戸 聡 稲村 哲也 大学院生	11月10日(土)	
	第2回	①県財政に与えたひずみ ②県立大学で開催したシンポジウム、国際交流	早川 鉦二 宮原 勇	11月17日(土)	
	第3回	ワークショップ「万博の経験を活かして市民参加の社会へ」	小池 康弘 その他	11月23日(土)	
	「万博が掲げた未来を実現するために」				
	第1回	①海から見た愛知県の環境 ②宇宙から見た愛知県の環境	吉岡 洋 吉岡 博貴	12月1日(土)	
	第2回	①サッカーをするロボット ②国際博覧会を通して見る情報通信技術の発展	成瀬 正 小栗 宏次	12月8日(土)	
	第3回	①光をつかってみえないものを見る－色の科学と光センサー－ ②画像通信－ワンセグからデジタルシネマまで－	田浦 俊明 鈴木 純司	12月15日(土)	
	20 (2008)	「『知の探検』…ソフトウェア、数学、ビジョン」			
		第1回	①ウェブを支えるソフトウェア ②身の回りを支えるソフトウェア	山本 晋一郎 粕谷 英人	6月7日(土)
		第2回	①脳を活性化させる数学－統計のウソとホントー ②脳を活性化させる数学－パズルの数理解－	SiSi 城本 啓介	6月14日(土)
第3回		①見ることを支える脳の働き ②映像のメディアを支えるイメージ処理	神山 斉己 河中 治樹	6月21日(土)	
「世界文学への道案内」					
第1回		いくさが投げかけた影 ①額田王と天智天皇との万葉歌 ②とはずがたりの世界－源平合戦・承久の乱後の日記と紀行文－	遠山 一郎 久富木原 玲	6月28日(土)	
第2回		英米フィクションの新しい読み方、書き方 ①不思議の国／鏡の国のアリスは食うのか喰われるのか？ ②女どうしの絆－アフリカ系アメリカ作家トニ・モリスンの挑戦－	川端 有子 鶴殿 えりか(悦子)	7月5日(土)	
第3回		歴史劇の東西古典 ①悲劇『アンドロマック』－トロイ戦争の伝説－ ②『水滸伝』と『三国志』－毛沢東にとっての延安－	小柳 公代 樋泉 克夫	7月12日(土)	
「ヨーロッパ近代への視線」					
第1回		①物語でたどるフランスの子ども史－17世紀から19世紀 ②近代の魔女迫害－女の魔女と男の魔女－	天野 知恵子 日置 雅子	11月8日(土)	
第2回		①スペインの地域的多様性とその要因 ②19世紀イギリス女性雑誌：イラストレーションと広告	奥野 良知 松本 三枝子	11月15日(土)	
第3回		①西欧派ドイツ・ナショナリズムと系譜－マックス・ウェーバーと19世紀ドイツ－ ②ロシア史における二都物語－モスクワとサンクト・ペテルブルグ	今野 元 加藤 史朗	11月22日(土)	
「今を生きる『知』」					
第1回		教育・福祉に見る「今」の知 ①ついていけない？－大きく変貌する しょうがい児者の教育と福祉 ②どうなる？高齢者医療！ ～迷走する高齢社会における医療をオーストラリアの医療から考える～	田中 良三 木幡 洋子	11月8日(土)	
第2回		物語・詩に見る「今」の知 ①文学に描かれたアメリカ人の人種問題 －アフリカ系アメリカ作家トニ・モリスンの挑戦－ ②明治文明開化期と現代社会～詩にあらわれた声・宗教・教育をめぐって～	鶴殿 えりか(悦子) 宮崎 真素美	11月15日(土)	
第3回		グローバルな世界から見た「今」の知 ①日本から見たアジア～メディアが生み出す中国～ ②南米から見た日本～ペルー・ブラジル両国における日系社会を介して～	樋口 浩造 川畑 博昭	11月22日(土)	

平成22年3月発行

編集・発行 愛知県立大学地域連携センター

愛知県愛知郡長久手町大字熊張字茨ヶ廻間1522-3

電話:0561-64-1111

<http://www.bur.aichi-pu.ac.jp/renkei/index.html>